

関西学院大学 社会 学部

卒業論文

(研究演習指導 立木 茂雄 教授)

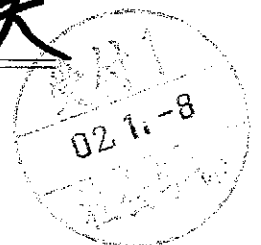
障害者レクリエーション・スポーツ

～神戸楽泳会との関わり、そしてタッチプロジェクトの立ち上げを通して～

2002 年 3 月 卒業

関西学院大学 社会 学部 8396 番
8493

板井達明 山梶秀夫



目次

・序論

1・はじめに

2・障害について

3・レジャー・レクリエーション・スポーツの構図

4・活動背景と分析方法

・本論

5・活動内容の振り返り（板井編）

6・活動内容の振り返り（山梶編）

・結論

7・結果と考察に代えて

・編集記

8・参考文献

9・本論文に関して

10・参考資料

1・はじめに

障害者スポーツが広く全国に認知されたのは、1998年3月に行われた長野パラリンピック冬季競技大会であったといえる。2000年8月のシドニー大会においても、日本選手は数多くのメダルを獲得し、その様子は数多くのメディアによってもたらされた。ここにきて、障害者スポーツの原点がリハビリテーション（レジャー・レクリエーション）の一環であったものが、競技の優劣に徹する高度な競技会になってきたといえる。それと同時に、スポーツに参加している障害者自身が大きく変化している。昭和40年代には、スポーツに参加する障害者のほとんどは、リハビリテーション施設に入っているか、または病院、療養所などで療養中の方々であった。それが近年では、職業を持ち、社会的に活躍している人が大変多くなってきている。したがって、これらの人々は自信を持って社会生活を行っているのは勿論のこと、スポーツそのものに、自己の限界に挑戦するといった積極的活動を行う人が多くいるということである。

障害者への関心は、パラリンピックなどの巨大なイベントにおいては、急激な高まりを見せるが、終了とともに関心が徐々に薄れていくというのが今日の現実である。だが、豊かな社会生活を目指し、数多くの団体がレジャーやレクリエーションを行い、社会参加の場を開拓している。そして、アスリートとして競技の頂点を目指す人もその様な場から現れてきている。そもそも、レジャー、レクリエーション、競技者スポーツとはいったい何なのか。

我々も障害者スポーツの存在は知っている。しかし、いつ、どこで、どのような活動をしているのかという知識は持ち合わせていない。また、健常者、障害者の間にまだ大きな溝がある。それは、お互いをよく知らない、知ろうとしないことに起因する。障害者スポーツを知ることで、両者の間にある壁を、理解に変えることができるのではないだろうか。

障害者スポーツ、その細部、現状を直に知るために、神戸楽泳会という障害者水泳チームに参加させていただいた。自らもまた、ふれあいを目的としたレクリエーションを開催した。本論は、障害者スポーツについて、レジャー・レクリエーションスポーツから、競技者スポーツまでを、練習や大会、レクリエーション活動を通じて得た実際の体験をもとに、自分たちの感じたこと、考えたことをまとめたものである。この論文が、障害をもつ人との交流や、障害者スポーツへの理解、問題把握に役立てば幸いである。

2・障害について

実際に障害を持つ方から伺った話や資料より、実情及び、身障者の日常での問題点を障害別に以下にまとめた。

I・肢体不自由者

障害の原因、機能障害のようすなど、一人ひとりによって全く異なるといつてよいほど、さまざまな人々で構成されている。ここでは、機能障害の内容を「杖使用者等の歩行困難者」「車いす使用者」「上肢障害者」の三つに区分する。当然、車いす使用であり上肢障害を伴わせもつ人もいるため、こうした人々は両方の障害の問題点を併せ持つことになる機能障害の内容は、立って歩行できるが不安定であること、もしくは、歩行において杖などの補装具が必要な者をいう。

①杖歩行者等の歩行困難

道路や公共建築物では、路面の障害物や表面の滑りやすさが移動に影響を与えるだけでなく、安全上の観点からは、車いす使用者よりも危険が多いと考えられる場面も多い。一般には、移動のハンディキャップはさほど多くないと考えられがちであることが、しばしば問題点として指摘されている。公共交通機関においては、特に生命に危険を伴うことが多く、より優先的な解決が望まれている。また、階段や狭い幅の通路など、基本的に解決すべき点も現在数多くある。

②車椅子使用者

基本的には立って歩行できないか、できても歩行速度や安全の面で実用的でなく、主な移動方法は車いすを使用する者をいう。車いす駆動は上肢障害が少なければ手動車いす、上肢障害が著しければ電動車いすを使用する。道路や公共建築物では、段差をはじめとした路面の障害物が移動に影響を与える。これは、単に利用しにくいというだけでなく、わずかな段差があるだけで、全く移動ができなくなることが特徴である。また、通路の幅では、ある程度の幅が確保されていないと、全く通ることができない。このように、移動地点間のわずか1地点に障壁があるだけで、実質的には単独で移動ができないことになるのが、車いす使用者の特質といえる。

公共交通機関においても、上記の問題点がほぼそのまま当てはめられる。現在の公共交通機関は、車いす使用者にとって現実には利用がたいへん困難といわれており、階段や狭い幅の通路など、基本的に解決されるべき点が多く見られる。

③上肢障害者

手指を使って物を持ったり、扱ったりすることが困難である、あるいは、できたとして

も重量が重い物や大きな物が扱えない、もしくは細かい動作やいろいろな動作を組み合わせたような複雑な動作はできないことが障害の特徴である。

日常生活のさまざまな場面において、物を操作するといった動作が必要なときにハンディキャップが多くある。これらは、切符等の自動販売機、金融機関等のキャッシュディスプレイペンサーといった機械設備に関する利用に問題が多いと言われている。こういったものは、今後ますます増加していつているが、障害者の利用が配慮されたものがほとんど見当たらない。

道路や公共交通機関では、上肢障害があるからといって、全く利用できないという場面はむしろ少ない。しかし、段差や認知しにくい路面の障害物、さらには滑りやすい路面などは転倒の危険があり、さらに下肢に障害がなくてもバランスをとりやすく転倒しやすいため、ひとたび転倒するとけがの程度が大きくなってしまう。よって、転倒の原因となる路面の状況には十分注意が必要とされる。

公共交通機関においても、上記の問題点がほぼそのまま当てはめられ、下肢障害者は、生命に危険を伴う場合もありうる。

Ⅱ・視覚障害者

① 全盲者

この中には光を認識できる者、目の前にある手や指程度の大きさの物を認識できる者などを含む。しかし、基本的には目で見える視覚情報を、実用的なレベルにおいて得ることができない者をいう。歩行も単独では困難だが、歩行訓練によって単独歩行が可能なことも多い。また、通い慣れた道なども比較的容易に歩行できる。しかし、単独歩行に関しては、障害をもった年齢や訓練の成果など、個人差が大きい。また、一般に考えられているほど点字が使用できる者は多くは存在せず、情報を音声によって耳から得ている者がほとんどである。

道路や公共交通機関では、その障壁となると考えられるものは歩行能力との関係が大きい。肢体不自由者のように、段差などの路上障害物によって移動が妨げられることは少ないが、段差や路面の障害物、さらに滑りやすい路面などは、肢体不自由者と同様に転倒の危険がある。そして、蓋の開けられたままのマンホールやホームから線路上への転落の危険といった、目で安全を確認することが求められる場面における安全性の確保に問題点が集約される。

鉄道やバス、タクシーなどの公共交通機関では、切符や各種特別利用券などの自動販売機化、路線のインフォメーションなど、その利用に視覚情報が必要な場面は年々多くなる傾向にある。特に鉄道においては、先に述べた安全上の問題点とともに、乗車に当たってさまざまな情報を視覚で確認する必要があるが多く、最も利用しにくいものの一つとなっている。

② 弱視者

視力があり、拡大すれば文字を読むこともできるなど・日常生活において視力は実用的なレベルにある。しかし、日常生活や歩行等において、危険回避の必要があるときなど、そうした情報を得にくい。

拡大すると文字情報を得られるものの、大量の文書による情報を早く正確に読み書きすることは困難である。したがって、文字と併せて補助的な音声情報があることは、弱視者にとっても有益である。

全盲者と同様、道路や公共交通機関では、その障壁となると考えられるものは歩行能力との関係が大きい。視力があるため、問題は少ないと考えられがちだが、路上の段差や障害物、滑りやすい路面など、安全上の配慮が重要な点は全盲者とほとんど変わりがない。

公共交通機関では、利用に視覚情報が必要な場面は年々多くなる傾向にある。都市内にある表示や看板などは大きく書いてあっても、それ自体がどこにあるかがわからないといった問題点も多い。

Ⅲ・聴覚障害者

① 高度難聴者

耳で聞く聴覚情報を、実用的なレベルにおいて得ることができない。ただし、補聴器などによって音の有無や大まかな方向などがわかる人もいる。

最近では、手話が使える人が多くなったが、すべての聴覚障害者が手話によって実用的なコミュニケーションができるわけではない。また、先天的、あるいは乳幼児期以前に障害をもつと言語理解等の発達に影響がでて、複雑な内容の会話や文書理解が困難なことが多くある。一般には、手話を知らない耳の聞こえる健聴者とのコミュニケーションとして、紙に書いて会話をする筆談が有効とされている。しかし、文書理解が困難な者には、短い文で簡潔に提示する必要があるなど、文書を媒体にしたコミュニケーションは難しい面もある。

発声・発語訓練が行われ、その成果がでている者は先天的に障害をもっているにもかかわらず、自分の意志を言葉によって相手に伝えることができる。

相手の口の動きを見て話の内容を理解する口話は、教育の場面で多く用いられているが、それ単独では完全な理解は困難である。それに、話す側も意識して大きく口を開けるなどをすると、かえって理解しにくくなる場合がある。手話や筆談、身ぶり手振りなどを併用するのが有効とされる。また、音が聞こえないことから、日常生活や特に戸外における歩行等において、危険回避の必要がある場面でそうした情報を得にくい。屋内では災害時の非常警報や避難・誘導の情報が得にくいことから、取り残される危険もある。ホテル等では、いったん部屋へ入ると外部から連絡のとりようがなく、この点についてはしばしば指摘されている。

② 軽度難聴者

わずかに聴力があり、補聴器などを利用して他人と会話することができる人も多くいる。しかし、コミュニケーションにおいては、一般の補聴器だけで十分な情報を得ることは必ずしも容易ではなく、相手の口の動き、身ぶり、手話、そして文書などの併用によって情報を類推していることが多い。ある程度聞こえることから、周囲からは「聞こえている」ものと認識され、多くの情報から知らず知らずのうちに取り残されることがある。

また、日常生活や歩行等において、危険回避の必要があるときなど、そうした情報を得にくいことなどは、程度の差こそあれ高度難聴者とほぼ変わらないほど問題がある。

次に競泳における障害のクラスを表記する。日本身体障害者水泳連盟の主催する日本身体障害者水泳選手権大会は、障害別（クラス）によって競技が行われている。

現在のクラスは、ドクターや、PT、OTで構成されるクラス分け委員会のメンバーにより、ベンチテストやウォーターテストにより個人の障害別に分けて行われている。障害別とは、簡単に説明すると同じ条件で競技が行えるためのルールのことであり、下記のように区分に分かれている。

クラス	水泳における障害の程度
脳原性以外の運動障害	
U1	両上腕切断、片前腕、片上腕切断、両上肢完全
U2	両前腕切断
U3	片上腕切断、片上肢完全
U4	片手部切断、片前腕切断、片上肢不完全、両上肢不完全、両手部切断
L1	両下肢完全、第6胸髄～第10胸髄損傷
L2	両大腿切断、片下腿・片大腿切断、第11胸髄～第2腰髄損傷
L3	両下腿切断、第3腰髄～第5腰髄損傷
L4	片大腿切断、片下肢完全
L5	片下肢不完全、両下肢不完全、片下腿切断、脊椎カリエス、片弯症
A	軽度障害
UL1	第5頸髄損傷、3肢以上完全障害
UL2	第6頸髄、第7頸髄損傷
UL3	第8頸髄損傷、片上下肢完全障害

	片上肢のどちらかが完全障害でどちらかが不完全障害のもの、小人症
UL4	片上下肢不完全障害 第1胸髄～第5胸髄損傷
脳原性の運動障害	
C1	最重度四肢麻痺
C2	重度四肢麻痺
C3	四肢麻痺～三肢麻痺
C4	重度両麻痺、重度片麻痺（片側のみで泳ぐもの）
C5	中度両麻痺
C6	アテトーゼ等、失調症等
C7	片麻痺（両側を使用して泳ぐもの）
C8	軽度障害
視覚障害	
B 1	視力0、光覚（手動判別ができるものを含む）はあるが指数（手指）判別はできないもの
B 2	手指判別可能なものから視力0.03以下のもの 両眼の視野が5°未満のもの、またはその両方のもの
B 3	視覚0.03より0.1以下のもの（0.03を含まない） 両眼の視野が5°以上20°未満のもの、またはその両方のもの 上記以外の視覚障害
聴覚・平衡・音声・言語障害	
D	聴覚障害、音声言語障害、耳性平衡障害

3・レジャー・レクリエーション・スポーツの構図

I・レクリエーション

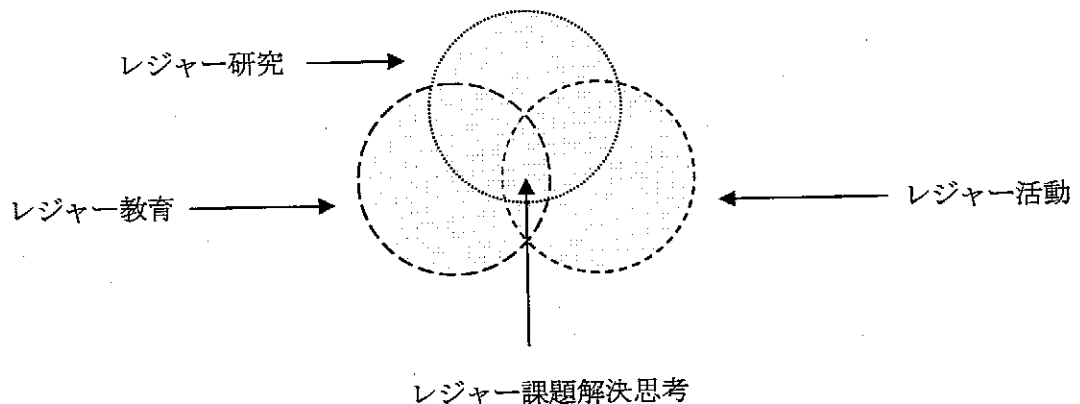
レクリエーションという言葉は、今日多くの場面で用いられているが、レクリエーションを一言で定義することは難しい。それはレクリエーションという言葉が単に外来語と言うことではなく、ある活動が、人によってはレクリエーションであるか否かという活動的な問題や、動機を含めた内面的、すなわち情動、態度の問題でもあるからである。多様な解釈の仕方があるが、本論では単に活動や情動のみを示すものではなく、対社会、そして個人との関わりの中で、個人あるいは集団がどのような動機で活動を行っているかに重点を置いた。以下にレクリエーションの特質として、六つの要素をあげる。

- ① レクリエーションは余暇（自由裁量時間）に行われる活動・経験である。
- ② その活動・経験自体が目的であり、楽しみとして行われるもので、自発的に行われる。
- ③ 気分転換となり、疲労回復に寄与する活動・経験である。
- ④ 個人の心身にとっても社会的にも、健康で豊かな人間性を養うことができ、明るい生活へ貢献できるものである。
- ⑤ 個人のみでなく、社会にとっても価値あるものである。
- ⑥ 創造性を養い、自己実現の機械となる活動・機会である。

II・レジャー

レジャーという言葉は日本語では「余暇」と訳され、単なる娯楽ととることが多い。だがその語源は、古代ギリシア時代にさかのぼる。仕事、あるいは労働をせず、自由な時間を持つ階級が自己研鑽のために行ったものがレジャーであり、その意味は「自由である」「学ぶ」といったものであった。

レジャーも上記のレクリエーションと同様に、個人の判断、主観、そして経験からニュアンスが異なってくる。そこで次の図のように、研究・教育・活動という三つの柱が、バランスのとれた形で、課題解決という立場から考慮する。



Ⅲ・スポーツとレクリエーションの関係

スポーツに親しんでもらいたい、そのためにはスポーツを「楽しい」と感じてもらうことが重要である。「楽しい」という言葉を別の言葉に置き換えて考えてみる。うれしい、おもしろい、愉快、簡単、きれい、積極的、できる、前向き、自主的・・・、全て気持ちがプラスに向かっている言葉である。どのような行為や活動をすると「プラスの感情」が引き起こされるかは人によって異なるが、この「プラスの感情」を引き起こす活動を「レクリエーション」とであると解釈する。

スポーツの特性の中でも重要なことは、それを行う人にとってレクリエーションを導き出すことのできる余暇活動（レジャー）だということである。仕事やリハビリを目的とした人にとってスポーツは必ずしもレクリエーションであるとは言えない。だがスポーツにあるレクリエーション活動たり得る側面を利用することにより、リハビリや教育に反映させることも出来る。何らかの障害をもつ人に対してスポーツや運動を提供する場合、今何を目的にしているのかをはっきりさせることも大切である。スポーツにはプラスの感情を引き出す力があるが、使い方を誤れば心身にマイナスの影響を与える危険性もあるためである。

競技スポーツとレクリエーションスポーツという分け方をよく目にする。しかしこの分け方では、レクリエーションスポーツには競技という要素が含まれないことになる。どのような目的で実施するのであれ、スポーツには競技すること、競うことが大切である。そのことがスポーツを楽しくさせてくれる一つの要素だからである。その対象が何であれ、競わないスポーツは楽しさも半減してしまう。レクリエーションスポーツはレベルが低く、競技スポーツは高いという考え方が適しているとはいえない。

レクリエーション活動は、簡単で、適当に、誰でも出来るということだけを指しているのではない。どのような形であれ、プラスの感情をもてるのであれば、それはレクリエーション活動であるといえるのである。レクリエーション活動を展開する場合、その点に留意することが必要である。

4・活動背景と分析方法

I・活動背景

板井、山梶ともに、初級障害者スポーツ指導員の有資格者でもあったため、障害者問題、とりわけスポーツを通じた活動に興味をもっていた。そこで、障害者スポーツに関わり、論文としてまとめることに決定する。

教授の紹介により、神戸楽泳会という身体障害者水泳チームに参加させて頂いた。「はじめに」でも述べたように、実際に体験をすることから学びとろうとしたのである。2001年の2月17日に初参加をし、今なお参加を継続している。

参加は一週間に1～2度を目安に、神戸市民福祉交流センターの室内プールにて行った。各地で行われた障害者水泳大会にも、競技役員やボランティアスタッフとして赴いた。

レクリエーション活動は「タッチ」という名称で、「だれもが気軽に参加できるふれあいの場の創造」を目的とし、2001年6月から同8月にかけて、計4回開催した。

II・分析方法

分析には活動ごとにまとめておいた記録をもとに、2000年10月から2001年11月までの活動をストーリー形式にした板井、山梶両名の振り返りを使用する。作業は次のような流れとなる。

- ① 主観的に文章化
- ② キーワード抽出
- ③ カード化
- ④ KJ法（カテゴリー作り）
- ⑤ 分析にかける
- ⑥ 考察

分析にはSPSSを使用し、コレスポンデンス分析を行った。板井、山梶、そして両名の3つのデータを分析にかけた。

5・活動内容の振り返り（板井編）

障害者スポーツへ辿り着くまで

3年生の後期ゼミが始まると、KJ法によって似たような興味を持った人が集まったグループが形成された。みんなは「家族」や「音楽」、「バスケ」といったキーワードで集まっている中、私は一人で「モータースポーツ」というかけ離れた分野を主張していた。しかし、これが最終的に卒論になっていくのだということを知り、その時点で孤立していたメンバーとグループを組んで、そのグループで何について自分たちはやっていくかということと話していくようになった。この時点での孤立メンバーからできたグループは山梶、田村、私の3人であった。

グループができて間もなくすると、他のグループはキーワードから何をしたいかという段階へ話を進めていっているのにも関わらず、私達はまだ「〇〇」というところで右往左往していた。この頃の私達は、自分たちのやっていく内容に関して(1)真剣に考えようとしていなかった。そんなながらも、(2)なんとなく「障害者」、「スポーツ」という所に共通して興味があることがわかってきた。ただ一人を除いて……。その一人は田村である。田村はこの後、私達の意見が「障害者スポーツ」に固まると、私達のグループを去ることになる。それより、何をするにも人数に泣かされる山梶と私の2人体制は始まったのである。

桜井さんとの出会い

「障害者スポーツ」というところに固まっても、そこからが進まなかった。(3)何をすれば良いのか全くわからなかったのである。そんな時、山梶があるボランティアに参加し、伊丹で障害者に水泳を教えている人に出会った。その人に相談して、そこへ手伝いに行かしてもらおうか、等という考えが私達のあいだで出ていた。ちょうどそういう話をしている時、1月22日のゼミで立木先生から「神戸で障害者に水泳を教えている人を紹介して上げるから、今度1月25日、市役所にユース（同じゼミの他のプロジェクトグループ）が行くときに一緒に来なさい」と言われた。その後、その日（市役所訪問の日）のことについて、先生に尋ねたかったがゼミはそれまでになく、ユースのメンバーに何をするのか聞いた。それによると、ユースはその日、なにやら企画書なるものを提出してプレゼンするらしい。え？なにそれ？っという感じだった。(4)私達は、何をするかすら決まっていなかったのに企画書なんか書けっこないよー、という気持ちでいっぱいだった。同時に、先生は私達にどうしろっていうんだー！と山梶と2人でぐちっていた。そして、伊丹で教えている人のところに行くのならこの市役所訪問には行かなくていいのでは、という考えも湧いていた。22日に先生に言われてから前日の24日の夜まで私達は市役所訪問に行くかどうか、(5)迷っていた。

結局、先生を通して紹介してもらった人のほうが何事にもスムーズにいくのではないかと、また、その日行ったからといって伊丹の方に行けなくなるのではないという話でまとめ、

一応、自分たちの企画書なるものを作って市役所訪問へ行った。

1月25日、市役所訪問の日はユースの他にPI(Project Imagine、これもまたゼミ内のプロジェクトグループ)も来ていた。前に聞いていた通り、ユースが市役所の人に対してプレゼンを行った。私達はそれを聞きながら(6)焦りが高まった。この後、自分たちに振られたらどうしよう……。何をしたいか、明確なものがない私達の企画書は到底、(7)企画書と呼べるものではなかった。さらに、そこで市役所の人に対してプレゼンなんて言われても(8)何も言えない、という気持ちがユースのプレゼンが終わりに近づくに連れて高まっていった。しかしその後、私達のグループに振られることはなかった。その後、各グループは市役所の担当の人とそれぞれ話をしていて、そこで私達のグループは、それまでプレゼンの場にはいなかったある人を先生から紹介された。その方が、神戸で障害者に水泳を指導しているという方だった。これが桜井さんとの初めての出会いだったのである。

その日は、桜井さんと少し話をする事ができ、名刺をもらうことで連絡先も得ることができた。その日の桜井さんの話の中に、(9)パラリンピックの話があった。桜井さんはシドニーに付き添いでいき、結果、桜井さんの指導している楽泳会チームから金メダリストが出たということだった。その際、選手たちが現地でレースだけに力を注げるような環境を提供するために尽力されたこと等が話から伺えた。また、シドニーパラリンピックはメディアが大きく取り上げ、世間の興味を引いた。そのせいで、パラリンピック期間中はホームページ等に応援メールが多数届いたという。それで、選手たちの(10)モチベーションはとても上がったという。しかし、パラリンピックが終わり時間が経つにつれて、そういう「ちやほや」はなくなり、普段の生活に戻った。そこでの選手たちの気持ちの変化について調べてみてもおもしろいのではないか、という言葉も下さった。もう1つ、障害者スポーツは近年飛躍的に発展していて、(11)指導方法もそれに着いていかなくてはならないということで、桜井さんは指導方法についてかなり勉強していることが伺えた。そういうものを追ってみても楽しいのではないかと言葉もいただいた。最後に、何でも聞きたいことがあれば5時以降に市役所に来るか、楽泳会に顔を出せばいいよ、とおっしゃってくださった。私達はこの日、桜井さんに会って話すことができ、パッと自分たちの(12)道が開けたような気がした。自分たちが何をしたらよいのか、(13)もやもやとしていたものを桜井さんが振り払ってくれ、道標を示してくれたような気がした。その日山梶と私は、一時はどうなるかと思ったけど本当に(14)来て良かったなー、と足取りを軽くして帰った。

初めての神戸楽泳会

市役所訪問後、私達は障害者スポーツについての何か、という方向は決まった。しかし、その先については(15)決めあぐねていた。そこで立木先生に「とりあえず、行きなさい(楽泳会に)」と背中を押されていたこともあり、また桜井さんに話を聞きたいということもあり、楽泳会に行くことになった。そして桜井さんにその旨のメールを送ると、すぐにOKの返事下さった。その後何回か連絡を取り合い、水着持参で2月17日(土)に楽泳会に

おじゃますることになった。水着持参？というところに疑問を持ちつつも・・・。

神戸楽泳会は福祉交流センター内10Fのプールで活動しており、1Fロビーにて桜井さんと待ち合わせをしていた。私達が待ち合わせの時間である4時の少し前にそこへ着くと、もう既に桜井さんと何人かの楽泳会のメンバーの方はおられた（その時はわからなかったが）。4時頃になると、みんな揃ってプールのある10Fへと上がった。更衣室で水着に着替え、プールへと入っていった。そこでは、2コースを楽泳会用のコースとして取ってあった。楽泳会のメンバーは能力で2つのグループに分けてあり、能力の高いグループ（以下Aグループ）は桜井さんが、それに劣るグループ（以下Bグループ）は埴岡さんが、それぞれ練習を組み立てて指導されていた。埴岡さんとはこの日初めてお会いし、神戸障害者スポーツ協会（事務所が福祉交流センター4Fにある）の嘱託社員で、長い間楽泳会と関わっておられる方だと後に知った。練習が始まってしばらくは、桜井さんの横について話を聞いていた。その後、桜井さんも私達もプールに入り選手達と一緒に泳ぐことになった。私は水泳の経験があったのでAグループ、山梶は未経験だったのでBグループにそれぞれ入り泳いだ。なるほど、こういう展開のために水着が必要だったのか、とこの時点でわかった。練習が終わると、プールサイドにメンバー全員が集まってミーティングのようなものがあった。そこで桜井さんが私たち2人を紹介して下さった。

更衣後、1Fのロビーでみんななんとなく集まって雑談をしていた。その後、これがいつものパターンだとわかるのだが。そこで、また桜井さんと話をすることができた。桜井さんは「楽泳会に来るのはいいけれど、これをどう卒論に持っていくの？」と聞いてくれたが、私達は「それが(16)まだ決まっていんです。」としか答えることができなかった。そこで桜井さんも、うーん、と一緒に考えてくれた。

私はこの日、楽泳会に行って一番感じたことは、(17)みんなとてもいきいきしているということだった。それまでに障害者スポーツの授業などを受講しており、そういうことはわかっていたつもりだったが、間近で見るとそれを(18)本当に実感できた。そして、片足切断、下肢麻痺、聴覚障害、弱視の人などが本当に上手に泳いでおり、上手にというレベルではなく、(19)速さを求めて泳いでいるのに驚かされた。それから、皆さんメンバー同士の仲がとても良く、終わってからも1Fのロビーで話が弾んでおられた。さらに、始めてきた私たちのことをよそ者視するようなことは決してなく、(20)温かく包み迎えてくれたような気がした。みなさんのそのような態度から、私達は少し(21)緊張がとれて帰路につけた。またこの日、卒論の相談にまでのつてくれる桜井さんに対して、私達の(22)信頼度・依存度というものが急上昇したように思われる。

2・24

この日（2月24日）は神戸で震災復興イベントがあった。このイベントのボランティアにわが立木ゼミから多くの人間が狩り出された。そう、この表現に表れているように、(23)自分からという気持ちはこの時の私には決してなかった。復興イベントに合わせて、同ゼ

ミのユースはバスケットリングを会場の一部に設置し市長までを巻き込んで、プロジェクトの実現に向かって進んでいるようだった。私達はというと、・・・(24)何も決まっていなかった。

この日、桜井さんも来られており、炊き出しのおでんなどをつまみながら話をする場があった。桜井さんは私たちが卒論の方向性について悩んでいるのをよく理解して下さっておられ、この日も助言を私達に与えてくれた。大きく2つの案があったように思う。1つ目は、神戸では震災後、このような復興イベントが起こっているがこれが祭りという形で後世に残っていくのかどうかを調べてみるというものだった。近畿で見ると、祇園祭や天神祭りはもともと天災がきっかけで始まった祭りである。神戸もそのように変化していくのだろうか、ということである。2つ目は震災モニュメントウォークである。これは、震災に関する慰霊碑等のモニュメントは、兵庫県下だけで160以上もある。これは誰が、どこに、何のために、どんな思いを込めて建てたのか、を調べるというものである。写真を撮り、建てた人に直接インタビューして回る、これで十分1冊の本ができあがるのではないか、というものだった。

私達は後者の震災モニュメントウォークの方にすっかり(25)心を奪われてしまった。そしてこの後、これについて調べていくことになる。

この時期、立木先生がユースやイマジンばかりを相手にして私達のグループをほとんど相手にしてくれない、という立木先生に対する(26)反感は、桜井さんがとても私達の相談にのってくれ色々な選択肢を出してくれることも手伝って、大きくなっていった。そう、この時は自分達のことは棚に上げて、(27)ただ文句ばかりを言っている子供であった。自分達がこういうことがしたい、と言って積極的に何かをぶつけていけば、立木先生も相談にのってくれただろう。現に、ユースやイマジン（他のグループもぶつけていったのかもしれないが、私の目にはこう写っていた。）はどんどんぶつけていったから、先生を独占することができたのだと思う。

モニュメントマップ早くも×

2・24が終わり、春休みに入っていたので、しばらくゼミはなかった。私達は震災モニュメントウォークについて、調べ始めていた。ホームページを検索すると、結構な数があった。調べるにつれて、もう既にマップ作成委員会というものがあって、震災モニュメントマップなるものが作られていることがわかった。私達はこれを1つずつ回っていこうと考えた。しかしこの時期、山梶は就職活動とクラブ活動、私は就職活動と課外活動で追われることとなり、集まって話を進めることはほとんどできなかった。「(28)早くしないと」という気持ちだけが2人の中で高まっていった。

そんな内に4年生新学期が始まった。新学期が始まると、ゼミで各プロジェクトの進捗状況報告があった。私達が震災モニュメントウォークのことを話すと、「もう既にあるだろう、君達は事始めをしなきゃいけないんだよ!」と言われ、棄却された。そして、「楽泳

会には、ずっと行っているのかい？」と聞かれた。私達が行っていないことを伝えると、「君達は汗をかいていない！もっと汗をかきなさい！」と言われた。

私達のモニメントマップ時代はこうして早くも幕を閉じたのである。今回も含めて今までずっと、立木先生のペースにはまってきたような気がしたが、私達は自分達の(29)核となる考えがなかったために言い返すこともできなかったし、そうならざるをえなかったのかもしれない。

再び楽泳会へ

再び先生に背中を押されて楽泳会に行くことになった私達。4月21日に行くことになったのだが、その日は同ゼミの田村、守井も合わせて4人で行くことになった。この2人のグループも何をするのか決まっておらず、とりあえず、私達と一緒に行ってきなさいと立木先生に言われてきたのである。この日は桜井さんはおられず、桜井さんと同じ市役所の水泳部の方で楽泳会に関わっておられる滝本さんと埴岡さんが指導をしておられた。1日参加した田村、守井の2人は、やはり自分達のやりたいこととは違うということで、この日限りの参加となった。

山梶、私の2人は続けて行くようにした。そして、翌週の4月28日行った際に、今シーズンの楽泳会が出場する大会の予定を聞き、いける日は大会運営のボランティアへ行くことになった。以下が、この時聞いた大会予定をまとめたものである。横に記載の名前は実際に参加した者の名前である。

6月24日 近畿大会—交流センタープール・・・山梶、板井

7月15日 神戸市大会—交流センタープール・・・山梶、小林、板井

8月19日 JAPAN パラリンピック—大阪なみはやドーム・・・板井

8月29・30日 臓器移植者大会—神戸ポートアイランドプール・・・山梶

9月8・9日 日本選手権—広島・・・山梶

この他に毎年春・秋の年2回、交流センターのプールで障害者の水泳教室（障害者スポーツ協会主催）が開かれるということで、そのお手伝いにもできる限り参加するという事になった。この教室から楽泳会に入る人も結構いるということだった。

また、桜井さんが卒論に対する次のような案を出してくれた。桜井さんが10年程前に障害者スポーツの活動状況、障害別の指導方法、今後の課題などをまとめて1冊の本にされている。その時点から現在までの活動状況や新しく増えた障害区分、10年前から変化した指導方法などを、私達で新たにまとめて1冊の本にしてみても、という意見をいただいた。これを作るには楽泳会だけでなく他のチームにも行って調べる必要がある。その1つに、神戸しあわせの村に、比較的重度の方がリハビリなんかに通われているチームがあるらしい。これを完成させれば、結構ボリュームがあつて面白いものになるのではないかという内容だった。

水泳教室（5月8日～6月8日）

上記の春の教室が間近に迫っていて、5月8日から火曜日と金曜日のPM6:00-8:00で10回あるということだった。私はこれに計8回参加した。この教室には他にも慣れたボランティアさんがたくさんいて、その人について一緒に参加者の指導をしたりした。私はだいたいのが、脳性まひのAさん（教室に参加されている中で一番重度と思われる方）の担当だった。参加者のほとんどは継続的に参加されていて泳げる人が多かったが、Aさんは今回が初めてで顔をつけることから始めるという状態だった。始めのうちは、本当に顔をつけるのもできなくて、少しつけては水を飲んでしまい、むせてしまう状態だった。この頃は体も拒否反応からか、硬直していたが、回を重ねる毎に顔を長いあいだつけられるようになり、体もリラックスできるようになってきた。表情も段々柔らかくなってきて、時折笑ったりするようにもなった。Aさんの担当がほとんどだったので、Aさんについて(30) もっと知りたいという気持ちや、(31) リラックスしてもらいたいという気持ちから、休憩時間に話し掛けるようにした。Aさんは話すことはできないが、うなづいたり、言葉にならない声を出すことはできる。私は一生懸命、意思疎通を図った。どこから来ているのかや、何歳かなどを知ることができた。どこから来ているのかを教えてもらうのにも1回の休憩時間を全て使う程、大変だった。終盤になってくると、Aさんはかなり大声で笑うことが多かった。水泳教室の環境にも慣れて、水泳の練習も楽しくなってきたのだろうか。私も(32) うれしかった。水にもかなりなれて、補助つきでなら体を伸ばして手を回して進むことができるようになった。すごい進歩である。1ヶ月前から考えるととても成長したことがわかる。私は水泳教室に通って、Aさんと肌と肌で接することで障害者の方ととても(33) 距離が近づいた気がした。

タッチを始める動機

この時期、水泳教室・楽泳会にはかなりの率で参加していた。しかし、(34) ただ参加しているだけで、先生の言う「事起こし」にはなっていなかった。私達はそれまで桜井さんや立木先生に何か(35) 与えてもらうのを待っていた。そのせいで結局、助言をもらうとほいほいとそちらになびき、だめだと言われたら、あーどうしようとなっていた。自分達が考えた(36) がんとした意見があれば、なびくこともなかっただろうし、だめだと言われても言い返すことや(37) 強行することだってできたはずだった。(38) 自分達の考えで何かをやらなければいけない、この頃やっとそんな気持ちになっていった。

何をしようか、それを見つけるのはそんなに難しくはなかった。自分達は今まで、楽泳会・水泳教室で障害者スポーツというものと関わってきた。楽泳会ではみんな泳げる人ばかりで競技スポーツとしてとらえている。対して、水泳教室は全く今までスポーツなんてしていなかった人から参加できる(39) 草の根的なものだった（この時点は、まだ水泳教室の期間中ですが）。この2つのものに関わることで障害者スポーツの頂点パラリンピックまでのプロセスみたいなものが見ることができた。実際に楽泳会の選手で、全くスポーツをしていなかったけれど、水泳教室→楽泳会という流れでシドニーパラでメダルを取るに至

るところまでいかれた方もおられる。

ここで私達は草の根的な部分に目を付けた。私達が参加した水泳教室は、神戸在住が在勤の身障の方であれば、誰でも参加することができた。しかし、新しい参加者というのはあまりおられず、毎年継続的な参加者が多い。このことから次のように考えた。障害者の方は自分にはスポーツなんてという思いから、なかなかこういうものに参加できないのではないか。しかし参加してみると、楽しさ、可能性や目標、または生きがいといったものを見つけて、継続するようになるのではないか。このような思いから私達は、家にひきこもりがちで、また何かしたいけれど始める勇気がない、といった障害者の人々が家から一歩足を踏み出して、活動範囲を広める、そういうきっかけとなる、そしてそこでは多くの人が集い交流できる、(40) そのような場を提供したいと考えた。そこで私達が考えたのが「タッチ〜ふれあいレクリエーション広場〜」プロジェクトである。

タッチ準備期間

タッチ、自分達がやりたいことが決まれば、もう(41) 善は急げである。私達は、楽泳会・水泳教室・就職活動・クラブ活動をしながらではあったが、(42) 後ろを振り返ることなく勢力的に準備を進めていった。しかし、山あり谷ありの準備期間であった。

まず、開催は毎月2回、第2・4土曜日の昼の時間帯にしようと考えた。これは第2・4土曜なら学校のある年代でも休みだから来れるし、土曜日は楽泳会が4時からあるので楽泳会の方にも参加してもらおうと考えての時間帯だった。

次にその時間帯で場所の確保だった。私達はそれまでずっと交流センターに出入りしていたので、交流センター内の会議室を利用してタッチを行いたいと考えた。そして、交流センターの受付へ行き予約状況を確認することにした。予約状況は私達の予想以上に厳しいものだった。私達の借りたい日に私達の借りたい部屋はほとんど埋まっていたのである。キャンセルは当日まで無料でいけるということだったので、その場でとりあえず予約できる限りは予約を行った。でも、どうしても会議室を確保できない日があった。どうしようかと考えていると、受付の人から「体育館の利用を考えてみては？」との提案をいただいた。私達はなるほどということで、早速体育館を管理しているスポーツ協会の方へと行った。そこには楽泳会でお世話になっている埴岡さんがいたので私達の事情を話して、話を聞いてみた。すると、土曜日は障害者デイなので障害者が利用するのは無料だが、予約はできないということだった。そういうことだったら利用はできるけど、みんな譲り合いで使っているので当日空いているかはわからないとおっしゃってくれた。この時点で第1回目の開催を6月30日(土)、303会議室で、第2回目を7月14日(土)、体育館で、第3回目を7月28日(土)、502会議室で、と決定した。この時は5月半ばであった。6月30日に1回目というのは早過ぎるのように感じたが、ゼミの他のグループにとっても(43) 遅れをとっているような気がしていたのと、1回目の日を早めに設定することで(44) 自分達のおしりに火をつけたかったということが考えられる。この1回目の開催日の設定がこの後大きく

タッチに影響を与えることになるともわからずに・・・。

次に私達は参加者を呼び集める為のビラ作りを行った。そしてある楽泳会に行った日に桜井さんにタッチの話をして、ビラを見せた。桜井さんは水泳教室で宣伝する機会を与えてくれた。そして、ある水泳教室の日（この日は私1人で参加）、教室が終わってから宣伝の時間を持ってくれた。そこでビラを配り、説明をして参加を呼びかけさせてもらった。反応は予想以上なものだった。「あいてたら行くわー」とか、「なにすんのー？」という声もあり、とても好印象だった。その反応を受けて、これはたくさん集まってくれる、私は(45)安易にそう思っていました。そして山梶にもそう伝えて、私達2人は「よーし、あとはスタッフ集めだー！」と(46)張りきっていた。

そこで、スタッフ集め。立木先生が「引継ぎをしないといけない」と言われていたのもあり、私達は3回生、2回生を引き込もうと考えていた。そこで私達は6月11日、総合政策学部の福祉系ゼミである渡辺先生に時間をもらい3回生ゼミでスタッフ募集の呼び掛けをさせてもらった。それと社会学部の武田先生にお願いし、6月14、15日、福祉学科のメゾマクロメソッドBという授業でスタッフ募集の呼び掛けをさせてもらった。両方で参加者用のビラを配り、興味を持った人は連絡を下さいということをお願いした。けれども、誰1人として連絡はなかった。はあー、私達は(47)落胆した。そんなある日、図書館で山梶と2人で話をしていると、小林（4回生、木村ゼミ所属で、2人の共通の知り合い）が「何やってんのー？」と言って寄ってきた。私達が自分達がやっていることを話すと、「おもしろそうやん」と意外な言葉が返ってきた。ここで、タッチプロジェクト3人目のメンバー加入である。この時私は、スタッフが全然集まらなくて困っていた時なので(48)ありがたかったが、果たして彼が本気でやってくれるのだろうか、という(49)不安は残った。

第1回タッチ開催

私達は準備段階でうまくいなくて(50)とても不安になっていたが、1回目の予定日（6月30日）が迫ってきていたので、そんなことも言っておられずどんどん進めていかなくてはならなかった。そして、山梶と2人で考えたのは人間すごろくである。これを実施するにあたり、スタッフが足りないと感じたのでゼミ内で当日の手伝いをしてくれないかと呼び掛けた。そうしたところ、4人のゼミ生がかけつけてくれた。何百人に呼び掛けても0の返答だったそれまでの経験もあり、そのゼミ生達の温かさに心底から(51)感謝した。そうして実施するに至った第1回タッチの内容は以下である。

開催日時

平成13年6月30日（土） PM 1:30～3:00

会費

300円

開催場所

神戸市立こうべ市民福祉交流センター 303教室

参加者

□ 運営委員：山梶、板井、小林

□ ボランティアスタッフ：中山、岡田、高次、森山

□ 参加者：横谷和浩（高1）、中部秀樹（30）とそのファミリー

（敬称略）

内容

人間すごろく：梅田から三宮までの阪急神戸線の各駅がある。スタートが梅田でゴールが三宮である。参加者は梅田発三宮行の電車になって、さいころを振って出た目の数だけ進んでもらう。しかし、ストップと書いてある駅では全員止まってもらう。各駅では色々な課題があり、その課題に挑戦してもらう。その結果、その場その場でこちらからポイントを出す。最後にゴールした地点でそのポイントの高い人には景品を用意している。各駅の他に1位にゴール→5ポイント、2位→3ポイント、3位→2ポイント獲得できる。

各駅の課題：

- 梅田：スタート
- 中津：クイズ大会
- 十三（ストップ）：自己紹介1
- 神崎川：川柳大会
- 園田：室内ボウリング
- 塚口：クイズ大会
- 武庫之荘：ジェスチャーゲーム
- 西宮北口（ストップ）：自己紹介2
- 夙川：クイズ大会
- 芦屋川：川柳大会
- 御影：室内ボウリング
- 岡本：クイズ大会
- 六甲：ジェスチャーゲーム
- 王子公園（ストップ）：動物占い
- 春日野道：クイズ大会
- 三宮：ゴール

役割分担

受付：高次

子供の対応：高次

速記（ゲーム中）：中山

点数を渡す（ゲーム中）：森山

カメラ：森山・岡田

盲の人の補助：森山・岡田

司会・進行：板井

ゲームアシスタント：山梶・小林

一、クイズ大会——山梶、小林両氏より出題し、正解すれば2ポイント獲得。

一、川柳大会——次に自分の番が回ってきた時に、最近身の回りで起きていることについて一句詠んでもらう。優良可で評価し、それぞれ3、2、1ポイント獲得。

一、室内ボウリング——ペットボトルのピンをソフトボールで倒す。1→3本→1、4→6本→2、7から9本→3、10本→4、ストライク→5ポイント獲得。

一、ジェスチャー大会——司会者が出したお題をジェスチャーしてもらい、参加者に答えてもらう。2分以内に正解が出れば1、1分以内で2、30秒以内で3ポイント獲得。

また、当てた人には1ポイント。

私達は、短期間にしては結構(52)良い企画ができたと自負していた。あとは当日に成功させるだけ、そう思っていた。しかし、事件は当日に起こった。

交流センターの 303 教室で当日スタッフへも内容と役割分担を説明し、準備を済ませて待っていた。その時、既に 2 人+お子さんの参加者は来ていた。というのも、2 人にはお願いをしていたのだ。交流センター内の教室は利用者の半数以上が心身に障害を持っている場合、利用料が半分ですむ。ただし当日、障害者本人が受付をして障害者手帳を見せることが必要だった。そのため、事前に楽泳会の 2 人へ、少し早めに来て受付をしてくれるようお願いをしていたのである。だから、この 2 人+お子さんがいたのには納得がいく。

万全の体制（自分達はそのつもり）で他の参加者を待っていた。ひょっとして部屋がわからないかもしれないからということで、ボランティアスタッフに 1F のロビーに立っておいてもらうことにした。時間が 1:30 に近づくにつれて、(53)焦りが生まれてきた。誰もこない。1:30 になっても誰もこない。どうしよう。「体育館にひょっとしたら人がいるかもしれないから（土曜日は障害者デイなので障害者の体育館利用などが多い）、その人たちを誘ってみたらどうですか？」中部さんにこのような言葉をいただき、とりあえずピラを片手に行ってみる事にした。私と山梶で体育館のあるフロアーに向かった。この時は(54)無我夢中であった。中部さんの言うとおりの、体育館横のコーナーで雑談している人達がいた。誘ってみたが、断られてしまった。そりゃ、そうである。いきなり見ず知らずの人がやってきて、今から一緒にレクリエーションしませんか？と言われても断るのが普通である。ピラを渡して次回もあることを宣伝し、その場はとりあえず 303 教室へ戻ることにした。戻ってみても、人は増えていなかった。

もうこれ以上待つても仕方がないということで、ボランティアスタッフの 4 人にも参加者と一緒にゲームに入ってもらって、始めることにした。ゲーム自体は盛り上がるのうちに終わったように思う。というか、ボランティアスタッフのみなさんが盛り上げてくれたと言った方が正しいかもしれない。その中でも、1 回生の時からずっと一緒だった森山君がとりわけ盛り上げてくれた。ずっとバカなことばかり一緒にやってきた(55)仲間がこうやって助けてくれている、森山君に対して、そして中山君、岡田君、高次さんというゼミ仲間に対して(56)熱いものがこみあげた日であった。この日のタッチはゲームを行った後にアンケート記入をしてもらい、終わりとした。

私達はその日、そのまま楽泳会の練習に参加した。その後私達は、第 1 回タッチを徹底的に振り返ることなく、もう次に迫っている第 2 回開催に気持ちは向いてしまっていたような気がする。一応、反省として以下のことを掲示板上には載せたが・・・。

反省・課題

まず初めに、参加者が 2 名のみだったということについて理由を考えました。1 つ目に考えられることは、当日が第 5 土曜日で、小、中、高校は学校があったということです。タッチは第 2、4 土曜日開催としていたのに、私たちの勘違いで第 5 土曜日に開催してしま

いました。2つ目に、中高生がテスト期間にかかっていたということがありました。3つ目に(57)絶対的な宣伝不足だと、思われます。5月の身障の水泳教室でビラを配って、あとは楽泳会で声かけをしていました。しかし結果、楽泳会の2人にしか来てもらえなかったのは、声かけも不足していたんだと思います。

当日は何とか、ボランティアに来てくれた4人に入ってもらってレクレーションを実施することが出来ました。皆さん、ありがとうございました。

これからやらなければならないことは、次回7月14日の開催に向けて内容を煮詰める。次回は体育館での実施なので、皆で出来る軽スポーツなどを考えています。あともう一つ、声かけに力を入れたいと思います。

また、月に2回開催というのは、かなり(58)大変だと実感しています。そういったことも含めてこれから考えていかななくてはなりません。

第1回タッチが終わって

上記の反省は、今考えても確かにその通りだと思う。自分達でも感じているように(59)過密すぎるスケジュールを立ててしまっていた。しかし、不特定多数に配ったビラには、7月14日と28日まで開催予定を書いてしまっていたので、(60)止めるわけにはいかない。タッチを盛り上げる為、自分達の立てた目標に近づける為には、上記のように(61)もっと声かけをしていかなければならなかった。養護学校などに尋ねて行って宣伝しようかとも考えた。タッチのことだけをやっていけばできたかもしれない。しかしこの時期、通常の楽泳会の練習にも参加しながら、障害者の水泳大会のお手伝いにも行き、山梶はクラブ活動、私は課外活動にも行くという状態であった。そんな状態で、大勢の参加者が来ても私達だけで対応できるのか。参加者はたくさん来て欲しいが、(62)あまり来すぎてもらっても困る。私にはこのような思いがあった。外へ出て行って宣伝して、もし大勢の人が来るようなことがあれば、それを受け入れられるだけの能力は私達にはあるのか？でも、私達が最初にプロジェクトを起こす際に立てた(63)目標はこれでは全く達成できない。私の中でこのような葛藤が長い間、続いた。山梶も少なからず同じようなことを感じていたに違いない。それを裏付ける話がある。参加者集めのため、養護学校に行って宣伝する等という話が出ていたが、決してその話が具体的になることはなかった。このことから、山梶も私と同じような思いを少なからず持っていたといえる。

第2・3回タッチ

第2・3回タッチでは、体育館での軽スポーツを企画した。第2回はシッティングバレー、第3回はキックベースを考えていた。結局、両回とも楽泳会以外で声かけをすることはなく、開催した。以下は、両回が終わった後に掲示板に載せた報告である。

タッチ第2回 7月14日(土)

スタッフ 板井・小林・山梶

参加者 樋口、岩崎、前田、太野垣、尾崎 他数名（敬称略）

内容 シットティングバレー、バレーボール

15点マッチ 1チーム3名（後4名）

基本的なルールはバレーボールと同じ。座って行うため動きは制限されるので、ネットは低め、何度でもボール回し可、ワンバウンドまで認められるなど、独自のルールを追加しました。

反省・課題 参加者は前回に比べ大幅に増えましたが、実際には現地で誘ってこの人数を得ました。参加者を集めるのに(64)苦労しています。軽スポーツは初めての試みで（前回もですが）(65)うまくいくか不安でしたが、スタッフを含め、参加者全員で(66)楽しめたと思います。しかし、参加者の人達はもともと知り合いばかりだったので、新しい交流という目的にはそぐわなかったです。次回は今回参加された人と、また全く新しく参加する人を加え、交流を深めていくことを目指したいと思います。シットティングバレーは、思ったよりも難しく、うまくボールに追いつけない場面が多かったです、が、それがまた新鮮でした。スポーツやレクリエーションを通じて、お互いの理解を深める場を創っていきたいと思います。

タッチ第3回 7月28日(土)

参加者：板井、小林（STAFF）、横谷君、幸田さん

内容：キックベース→スタッフも入って、2（板井、幸田チーム）VS 2（小林、横谷チーム）で行った。通常のキックベースのルールで本塁、一塁、二塁のみ（三角ベース形式）とし、ランナーが足りないときは、透明ランナーを使った。5回まで行い、接戦の末、16対17で小林、横谷チームがサヨナラ勝ちを収めた。

反省・課題：またしても(67)人数が集まらなかった。前回の参加者達に事前に連絡したが、(68)手応えがなくそういう気配は感じていた。人数を集める難しさに、とても頭を痛めている。そこで、これからは方針を変えていくことにした。今まで月2回開催するとしていたが、これを止め、基本的に月1回の開催として、1回1回にもっと力を入れていこうと思う。その始めとして、8月には、神戸で行われる未来体験博へみんなで行こうという企画を考えている。これは今までとは違って、事前に申し込みをしてもらう形を取り、参加人数を把握できるようにした。この日(28日)に4人の楽泳会のメンバーが申し込みをしてくれた。これから、もっと集めていかなければ・・・。

2回目の開催は参加者0だった。しかし、当日体育館横のコーナーで話している人を誘って半ば無理矢理引き込んだのである。毎週土曜日、3時から体育館で行われているバスケットのクラブ（？詳しくはわからない。コーチもあり、毎週活動しているのは確かで、どうやら知的障害者で構成されているもよう）に参加している人達で、早くに来て雑談してい

たのであった。始め、そこにいた3人とスタッフでチームを作ってシッティングバレーを行っていたが、途中からバスケクラブの他の人が来る度に入ってもらって、人数が増えていった。この日実は、横谷君（楽泳会の選手、1回目も来てくれていた。）が来てくれていたのだが、すれ違いで会うことができなかった。3回目の参加者は1名だった。それは横谷君だった。2回目の時に参加してもらった人達に電話で連絡したが、電話番号が違ったり、断られたりで来てもらうことができなかった。例のごとくバスケクラブの人で早く来ていた人が1人いたので誘って、入ってもらった。そしてスタッフ（この日、山梶はクラブの遠征で来れず、小林と私の2人）も入れて4人でキックベースを行った。本当にこの2回の開催は(69)消化しただけにすぎなかった。

第4回タッチ（未来体験博）の準備

この2回の開催はビラに開催予定を書きってしまっただけに(70)せざるをえなかった。そして、それまでで一番辛いのは当日にならないと人数がわからないということだった。この経験から私達は8月はそれまでとは違うパターンでいこうと考えていた。そこで目をつけたのが、神戸市が夏休み期間に開催する21世紀未来体験博というものだった。これにみんなでいこう！と考えた。そうと決まれば(71)善は急げである。早速準備に取りかかった。日時設定から始め、ビラ作りを行った。今度はビラの右端に切り取り線を付け、申し込み用紙を付けた。人数を事前に把握するために申し込み制にしたのである。そして、このビラを楽泳会、神戸市障害者水泳大会、第2.3回タッチで配り、アピールした。

小林との確執

このビラ作りの際にプロジェクトメンバーの中で(72)確執が起こった。確執といっても私の小林に対するものが大きかった。小林は、タッチプロジェクトが始動してすぐの頃にメンバーに入ったのだが、それまでは私たち2人を手伝ってもらっているという感じであった。しかし、小林もこれを卒論にするのならやはり1/3の仕事をしてもらわないと、という(73)気持ちが私は強かった。この頃、(74)プロジェクト自体がうまくいってなくて、私と山梶は真剣に悩み話し合っていたが、それについて小林は全く悩んでいる様子もなく他人事のようにであった。私は「何でこんなやつがおれ達と一緒に卒論で出せんねん、おいしいとこだけ持っていくなんて(75)許せるか。」という気持ちが強まっていった。

そこで、未来体験博のビラ作りをするのに小林にも仕事を割り振った。ワードで内容を考えて打ってくるということだったのに、小林は手書きで、しかも到底ビラに載せられるような内容ではなかった。小学生の書くレベルであった。それに対して小林は「おれ、パソコン見たら壊したくなる病気やねん。」等と言っていた。私の(76)怒りは爆発した。はつきりと思っていたことを言った。私は十中八九、私達の前から去るだろうと思っていた。それほどまでの事を言った。

小林は、卒論はタッチを止めて違うことを書くが、楽泳会やタッチには行くという答え

を出した。私には理解できなかったが、スタッフ不足ではあったし、本人が来ると言うのであるから、手伝いという形で来てくれるのは(77)ありがたかった。

この一連のことにに関して山梶は特にどちらを責めることもなく、大きく見守ってくれた。この後、手伝いとして参加する小林に対して、私が素直にありがとうと言えるようになったのも、山梶という存在が潤滑油になってくれたおかげだと言える。私はこの時、自分の感情だけに走ったまるで子供のような行動を優しく見守ってくれた山梶を、父親のような存在に思った。

この一連の騒ぎでタッチプロジェクトの正メンバーは山梶と私の2人に逆戻りとなる。

第4回タッチ（未来体験博）

この未来体験博の事前申し込みは8人であった。申し込みがあったのは、楽泳会のメンバーとその家族のみであった。神戸市障害者水泳大会の時などは非常に興味を持ってくれた人などがいたのに、その人たちから申し込みの連絡はなかった。その時に申し込み用紙を書いてもらっておけば良かった、と思った。

そして8月12日当日、私達3人は9:30頃ポートライナー三宮駅の改札前広場にいた。集合場所である。集合時間は10:00であった。10:00前には幸野谷君、高岡さん、中部さんとその家族は来ていた。しかし、久保田君と横谷君が集合時間になっても姿を見せない。2人に電話をかけて見ると、横谷君は用事でどこかに行っているらしい。来れないのなら連絡くれよー、とみんなで言い合った。そして、久保田君には連絡がつかない。全員で待っていても仕方がないので、山梶と小林がその場に残ることになり、私ともう来てくれているメンバーは先に会場の方へ向かうことになった。会場まではポートライナーに乗って20分ほどであった。私は道中、中部さんのお子さん、ユイちゃん、マイちゃんと仲良くなろうと試みた。人見知りをするらしく、始めはあまり目も合わせてくれなかったが次第に話すようになった。会場についてまもなく、山梶、小林と合流した。久保田君とは連絡がとれ、今日のことを忘れていたということだった。そして、家が三木で遠いので今日はもう来ない、とのことだった。ふー。気を取り直して、来ているメンバーで楽しもう、という事で未来体験博を満喫してきた。途中、読売新聞の記者に取材を受けたりもしながら。来てくれたメンバーもそれなりに(78)楽しんでくれていたようだった。ユイちゃんを私が肩車するようなシーンもあり、(79)わきあいあいと過ごすことができた。13:00頃、ユイちゃん、マイちゃんがお腹が限界ということで、会場を出て昼食をとることに。少し歩いた所のレストランに入り昼食をとり、三宮まで帰ってきた。そこでタッチは終了したが、みんなでボウリングがしたいという話になりラウンド1へ行った。しかし、2時間待ちという事で断念し、解散となった。

この第4回タッチは(80)わきあいあいと楽しいムードのうちに終わることができた。しかし、参加者は楽泳会関係のみだった。私達が初め、タッチプロジェクトを興したときの(81)目標には、4回目にしても全く近づいていなかった。というよりこの頃、私達はその

(82) 目標に対する意識が薄れてきていた。タッチ以外でも多忙なスケジュールの中、とりあえず無事に終えられたことで、(83) ほんと安堵感を得ていたような気がする。

8月

第4回タッチを行った8月であったが、夏真っ盛り、水泳のシーズンということもあって、楽泳会のほうも試合続きだった。私達も楽泳会、試合のお手伝いに、できる限り参加していた。そうしているあいだに、あっという間に8月も終わりを迎えた。

9月

そして9月。第5回タッチはボウリング大会だと、前回終わった地点では言っていた。しかし9月は、山梶が福祉実習で丸1ヶ月抜けてしまった。そんな中、9月8・9日の日本選手権の付き添いには山梶が行ってくれた。私がある日行けなくて、山梶が実習の休みに行ってくれたのであるが、本当に申し訳なかった。そして9月はタッチはお休みし、私は楽泳会におじゃまするのみとなった。

29日に卒論中間発表があるため、(84) とりあえず今までの活動を模造紙にまとめて出した。この頃から、「どうやって卒論にする？」という話が2人のあいだで出ていた。

10月

10月は逆に私が福祉実習で丸1ヶ月抜けてしまった。立場が逆転し、山梶が1人で楽泳会におじゃまする格好となった。私はゼミにも出ることができず、山梶に迷惑をかけることとなってしまった。

28日楽泳会のバーベキュー大会に呼んでもらい、ちょうどその日は実習が休みだったので、山梶と2人で行かせてもらった。久しぶりに楽泳会の人達と話したり、五目並べなどをしたりして、楽しませてもらった。実習の疲れを癒すことができたと思う。

2ヶ月間、(85) プロジェクトを進めることはできない。今まで2人で何とかやってきたが、1人ではどうすることもできず、(86) 人数の少なさを厳しく実感した2ヶ月だった。何もできないからか、提出期限が近づいてくるからか、「どうやって卒論にすんの?」、「どうやったら卒論になんの?」という思いが2人とも、(87) どんどん強くなっていった。

そして、私達がお互いの実習で足止めを食っているうちに、タッチの5回目の開催は忘れ去られていった。そう、自然消滅的に……。私達の頭の中ではプロジェクトは終わり、(88) 意識は卒論モードに変わっていた。

6・活動内容の振り返り（山梶編）

とっかかり（モータースポーツは？）

最初のきっかけは何だったのだろう。2000年末から卒業論文作成のため、ゼミで興味分野について話し合う機会が設けられたことは確かだ。当初私は漠然と“福祉系の勉強をしていることだし、高齢者問題か障害者問題についてやりたいな”と考えていた。また、論文=本で調べる、その様に考えていたように思う。そのためアクションリサーチというものイメージがはっきりと浮かばずにいた。今思えばこのことが、何かひとつの方向性を目指しながらも、人の意見に左右され、遠回りを重ねていくという、我々のグループの原因になったのだろう。

同じ興味というより、他グループの興味と異なった数名が集まったという感じの数名が「なにをしたいか」について相談した。そして、(1)スポーツ・障害者という二点の関心から、板井君と組むことになった。その旨を先生に伝えると、「神戸の障害者水泳協会にうつつけの人がいる。」と、桜井さんという神戸市民局の人を教えてくれた。そこに入り込んでみてはどうかということである。自分たちの強い意思と言うよりも、(2)先生の勢い、そして、(3)何かしておかないと、という気持ちから、“自分のやりたいことは本当にこれだろうか”と思いつつも「プロジェクト・パラリンピック」(*1)という名前で、市役所を訪問することになった。

(*1)当初は障害者スポーツ=パラリンピック、そのくらいの考えしか持ち合わせていなかったため、このプロジェクト名とあいなった。

市役所訪問（雨天決行）

1月25日、私達は「行けば何とかなる。」「ならんよ。」そんな会話をよそに、市役所を訪れた。事前に「企画書を作成しなさい。」と先生に指示されていたが、(4)何をするのか、したいのかがはっきりしていないため、十分な企画はできていなかった。漠然とプロジェクト名の示す通り、「パラリンピックのことについて調べる」「障害を持つ人の現状や問題を見つける」その様なことを考えていた。とにかく(5)現場に入り込みさえすれば何か見つかるだろう、そのくらいの気持ちであった。

会議のテーブルでは、他のグループ（PI、ユース）の企画に市役所の人が関心を示し、質問や意見が交わされる。“我等の番になったら、どこまで話せるか、うまく説明できるか腕の見せ所だ。”とか思っていたら、その思いもつかの間、別室へ案内される。肩透かし。そこで、桜井さん(*1)とお会いした。第一印象は「仕事ができそうな人だ」というもの。柔和さの中に意志の強さが感じられた。要するに少しおっかなかった。先生が「彼らは障害者スポーツに興味を持っています・・・」と紹介する。内心迷惑がられないか、「なぜ？」と聞かれたとききちんと説明できるかどうかと、ハラハラしていた。なぜなら、(7)自分の

気持ちも十分に整理できていなかったから。“障害者スポーツのここが知りたい！”という強い気持ちは、まだ形をなしていなかった。そんな私たちに、桜井さんは快く「どんなことを知りたいのかな。」と親切に話をしてくれた。私たちが障害者スポーツに興味があり、そのことについて知りたいと答えると、シドニーでの選手の環境、ボランティアとの距離について教えてもらった。(※2) ここでも終始つきまとっていたのは“本当にこのプロジェクトはできるのか”(※3) というもの。やるからには真剣に取り組まないと失礼にあたる。名刺を頂き、少し(8)緊張しながらそれを見つめ、(9)期待とそれを上回る(10)不安を感じていた。

(※1) 神戸市市民局の人。神戸楽泳会という障害者水泳のコーチをしている。シドニーパラリンピックでは水泳選手団とともにシドニーに渡り、メダル獲得にすごく貢献している。メガネが似合う。ダンディ。

(※2) ここでの話は、パラリンピックで注目されボランティアが増えたが、イベントが終わるとその熱も引いてしまったことや、本人とボランティアとの気持ちのすれ違い、軽い気持ちではかえって傷つけることがあるといった、転移ー逆転移について説明してもらった。私の勝手な想像だが、暗に「君たちもいいかげんな気持ちなら遠慮するよ。」そう言われた気がして緊張した。

(※3) 予定では週に1,2回参加することになっていた。プロジェクトに二人しかいなかったし、私自身クラブ活動(ボート部)が大変だったため、時間的余裕がなかった。自分の中での優先順位は、クラブ活動のほうが断然上だったのも事実である。

初泳ぎ(不安いっぱい)

「はよアが取りなさい。」そう先生にせつつかれながら、なんとか2月の17日に練習に参加させてもらう約束を得ることができた。テスト中、翌日練習といった環境のため、(11)あまり乗り気ではなかったのが正直なところである。楽泳会の人と仲良くできるかという(12)不安も大きかった。障害をもつ人と付き合ったことは今までないといっているからだ。変な目で見てしまわないか、逆に変な目で見られないかと(13)心配だった。少し大げさだが、そこは未知の世界だからである。

当日、水着を持って神戸市市民福祉交流センターのプールへ。桜井さんに「関学の学生さん。楽泳会について知りたいらしいから、仲良くしたって。」というような紹介をしてもらう。回りを見渡すと、みんな泳ぐのがとても上手。(14)想像以上のレベルである。一緒に練習に参加したが当然ついていけず。隅っこで埴岡さん(※1)に平泳ぎを特訓してもらう。よく考えるときちんと泳ぐのは3年ぶり。板井君は隣できわどい水着を着用しながら、他の人と談笑している。さすがだな、と感心していた。

当初(15)心配していた“うまく付き合えるのかな”ということは(16)杞憂に終わった。みんな気のいい人ばかりで、年齢も10代から40代くらいまで。ただやはりレベルが高い。

補助することなどないように思われた。(※2) 初対面の人と話すのは得意ではないが、そうもいってられない。「結構疲れるね。」「そうでもないよ。」などと切り返されながらも、数人と話をした。“どうして水泳をするようになったのかな～”ではなく“泳げてないのは俺だけかい!”という叫びが心を占めていた。

弱視、下肢障害、上腕障害といった人と会った。話すことに(17)遠慮などしなかったと言えば嘘になる。意識してかどうかはわからないが、(18)障害についても触れなかった。でも“無理にそんなこと聞くこともないか”と(19)ひらきなおった。そう思いつつも、障害者問題に自分に取り組めるのかどうかという(20)不安が消えることはなかった。

(※1) 神戸市市役所に勤めている人。楽泳会のコーチ。年配の方で交流センターの事務局で働いておられる。愛称ハニー。

(※2) 技術指導など逆立ちしてもできるものではない。主にタイムの計測をコーチの代わりに行うようにした。

障害者スポーツ研究 (資格取得)

卒論を進めるうえであった方が何かと便利だろうと言うことで、「初級障害者スポーツ指導員」の資格(※1)を申請した。ここに来てやっと、本格的に障害者スポーツに取り組む(21)意思が生まれたといえる。

授業、そして文献などから障害者の人たちのことを少しなりともわかっているつもりであった。いや、そう思うことで(22)先入観を捨てたかったのかもしれない。障害がある＝劣っているということでは決してない。自分は(23)偏見をもった人間ではない、そのような自負もあった。しかし、実際にその場に飛び込んだ結果、実に(24)曖昧な自分が出ていたように思う。

私は障害については一切触れなかった。その部分を切り取って接することで、偏見を持たないようにしていたのではないだろうか。普段通りに接することが出来た、裏を返せばそれは(25)障害について考えなかったから、そんな気がしている。上腕や下肢に障害がある人がある。弱視の人がある。車椅子を使用している人、杖を使用している人、補聴器を使用している人。やはりその部分に目が行ってしまう。そのことを(26)悟られないようにしようとしている自分がいた。(27)表面しかわかっていない、(28)深くわかろうとしていない証拠に思えた。

泳いでいる姿を見て思わず出た言葉。「(29)すごい。」何がすごいのかを考えた。私の心は、“障害があるのにこれだけ泳げるなんて”そういうものであったように思う。障害者がスポーツをすることがすごいのではない、これだけのパフォーマンスを発揮できるのが(30)すごいのである。そう気付いたのは振り返りをしているときだった。楽泳会の人達に会って障害者スポーツについての(31)意識が全く変わった。やはりリハビリに近いものだと思っていた。パラリンピックを見た後でも、(32)障害者スポーツを競技スポーツとしては捉えて

いなかったように思う。実際に体験してその(33)考えを改めることができたと思う。

(※1) 財団法人日本障害者スポーツ協会が定める資格。

2月24日(卒論の方向性1・揺れる思い)

神戸震災復興イベントに参加。偶然そこで桜井さんと会う。そこでまた卒論について相談する。確かに先生の言うように入り込むことはした、だけど、(34)そこからどうしたいのかが見えてこない。自分が望んだことなのに卒業論文、そう考えるとそこから動けなくなっていた。そのため安易な道を探していたのかもしれない。桜井さんから「震災モニュメントウォーク」(※1)の話聞いたとき、こちらのほうが卒論として取り組みやすいのではないかと考え、その資料を探すようになった。ただただ(35)明確な方向性が欲しかった。

(※1) 震災後の慰霊碑などのモニュメントを調べ、「どこに、何のため、どんな思いで」をまとめるといったもの。それが今後「祭り」といった大イベントに発展する可能性も探ろうと考えた。

モニュメントプロジェクト却下(卒論の方向性2・クラブ活動との両立のしんどさが他人にわかってたまるかい)

4月9日、三宮で特別にゼミが開かれることになった。就職活動のため遅れて参加すること。偶然板井君と梅田で合流したので、二人でゼミが行われている場所へ向かった。ゼミの行われている部屋に入るとなんとなく重い空気が。遅れたことを詫び、席につき、そこで先生にモニュメントウォークについてやろうとしていると打ち明けた。その様子は次のようなものだったと思う。

「・・・ということをもとめようと思っているのですが。」と私がモニュメントウォークについて発言。すると「なぜそうなったん？そんなものは他にもやっている人がいるよ。」「最初とところろ変えてしまっただめじゃないか!」「君らは汗をかいていない! (怒)」と散々しぼられる結果に。「(36)方向が見えてこないんです」「一回だけです」「汗はかいています、嫌になるほど」と(37)反論したかったが、確かに、障害者スポーツで集まり、楽泳会にも参加させてもらっているのにそれが生かせていないし、モニュメントウォークは自分たちで考案したものではない。板井君と話し合い、(38)初心に戻ろうということになった。(39)とりあえず今は楽泳会に参加しよう、(40)考えるのはその後だ、そう思うようになったのはこのころからだっように思う。ただ、鞆にしまっている資料が無意味になったと思うと、少し(41)やりきれなかった。

幸い楽泳会と泳ぐことが(42)とても楽しくなってきた時期でもある。だが依然として(43)時間的余裕がない。クラブ活動に加え、就職活動まで入るようになった。クラブを休んでチームに迷惑をかけるのは嫌だったし、就職活動をおろそかにするなんてことは、できる

わけがない。一時的に卒論の問題を(44)棚上げしてしまう結果になった感じは否めない。

新幹線の中で（卒論の方向性 3・見えないフジヤマ）

4月25日、東京へ向かう新幹線で板井君と一緒にになった。自然に話題は卒論のことに。前日のゼミで「自分たちでこと起こしをしないか」という話になった。「楽泳会で学んだノウハウを活かし、自分らでやってみない？」「誰でも参加できるレクリエーションにしよう。」「ならまた企画をたてなあかな。」「で、なにを調べる？」といった具合に話をすすめた。(45)閉塞気味だった私はこの時“これだ！”と思った。「楽泳会の人たちを中心に、いろんな人に参加を募ってみよう。」こうして(46)障害者・レク、「タッチ〜ふれあいレクリエーション広場〜」案ができた。ネーミングは板井君の鶴の一声でタッチに。これならそこでアンケートを集め、多くの要望が聞ける、分析もできる、そう考えていた。冷静になって考えると、「こと起こし」という言葉と、他グループの活動に気をとられ、(47)焦っていたのだと思う。楽泳会に参加しながら、レクリエーションも自分たちでできるのか(48)深く考えることはなかった。(49)とりあえずやってみよう、そういう感じだった。二人ともこれから受ける面接のことを話しながら、途中で眠りについてしまった。

水泳教室（脳性麻痺の人と）

5月の8日から毎週火曜、金曜に全12回、水泳教室のお手伝いをするようになった。これは、初めて水に入る人や、ほとんど泳いだことがない人が対象である。水に慣れ親しんでもらうことが目的で、リラクゼーションを中心としたプログラムが組まれていた。

私は脳性麻痺のAさんと一緒にプールに入るようになった。Aさんは右半身に麻痺があり、言葉も発することはできない様子。年齢は同じくらいだろうか。(50)緊張しながら「今日はよろしくおねがいします。」と挨拶をする。Aさんもそれに会釈を返してくれた。“存分に楽しんでもらおう、きっと楽しみにされているはずだから”そう思った。埴岡さんや滝本さん（*1）と一緒にいてくれたので、見よう見まねで水に慣れてもらうことに。主に私がからだを支え、Aさんに仰向きで水面に浮かんでもらう。全身をリラックスしてもらい、水の負荷を感じることによって緊張をほぐすのがその目的である。「麻痺がある場合は抹消を無理に動かさず、からだの幹に沿って大きく動かすことが大事です。」と教わる。最初はAさんも私も(51)硬さが抜けなかったが、徐々にリラックス。意思の疎通ができていくかどうか(52)不安を感じつつも、「どんな感じですか？」「結構楽しいですね。」と、色々話し掛けることを続けると、笑顔が返ってくる。その日一日で、Aさんは驚くほどの上達をみせた。終始笑顔だったことで、私も(53)とても嬉しかった。その後、埴岡さんらの教え方をじっと見つめ、その方法を学び取ろうとする。タッチでも教え方など必要になる、そう思いながら。

初めて重度の障害のある方と接する機会であった。楽泳会の人とコミュニケーションで困ったことはない。そのため(54)障害について意識することは少なくなっていた。今回はその

コミュニケーション手段が難しい状況であった。(55)会話が出来ないだけで私のコミュニケーション手段はほぼなくなってしまったのである。身振り手振りや何度も確認をすることを意識したが、(56)こちら側の一方的な解釈に陥ってしまった感は否定できない。

結局、私は初めの2回しか水泳教室には参加していない。クラブのオフが終わったからである。クラブ、授業、卒論、バイト。(57)忙しさは相変わらずだった。その忙しさに、“これだけやっているのだから・・・”という(58)変な満足感と“何でこんなにしなければいけないのだ”という(59)不満が私にはあった。自分から進んで始めたことを忘れ、クラブのせいにして活動をおろそかにしていること、板井君への負担がその分大きくなっていることには気付かない、というよりも考えないようにしていたように思う。

(※1) 神戸市市役所勤務。楽泳会のコーチ。30歳代。楽泳会のホームページなどを手がけている。桜井さんとともにチームの強化に努める。22歳で結婚。

タッチ計画 (苦難の道のり)

計画を実行に移すため、その準備をすることに。タッチの目的は「皆が気軽に参加でき、レクリエーション活動を通じて交流を深める場を創造する」といったものである。まず必要なものは「スタッフ・場所・参加者・詳しい内容」であった。たびたび図書館に集まりプランを考える。ここから苦しい日々が始まった・・・。

ビラ作り (なかなかの秀作)

「どんなレクリエーションをするかは、どれくらい人が集まるかによるよな。どうやって人集める?」「楽泳会の人に話し掛けるやろ、んでビラ配ったり、施設行ったりするのはどう?桜井さんとかにも協力してもらってさ。」という会話をしながら、じゃあビラを作ろうということに。「俺やるわ。」と、軽く引き受けてしまう。結構こういう作業は好き。で、日時は1回目を6月30日に、2回目を7月14日、3回目7月28日と設定。以降はまた連絡しようということになった。場所は楽泳会の練習もしている市民福祉交流センターで。教室が有料で借りることができるらしく、そこを借りることに。会費を各回300円集めようかということになった。個人的には無料が好ましかったが、(60)自己負担は辛い。“それに見合った、楽しいレクをすればいいんだ”そう考えるようにした。出来栄えは思ったよりよい。早速何枚も印刷した。“(61)いけるかも”その気持ちが膨らんだ。

スタッフ集め (空回り)

「たった二人じゃな。スタッフ集めよ。引継ぎの問題もあるし。」という板井君の言葉に賛成しスタッフを募集することに。でもどうやって集めるようか。私には、正直まったくあてがなかった。引継ぎと言っても(62)計画自体がまだ緻密さを欠いている。(63)理想はあるのにそれに向かうすべがわからない。そうしている間にも時間はどんどん過ぎていく。

(64)焦りは募るばかりだった。

6月11日、三田キャンパス総合政策学部へ。なぜそんなところに？確か「総政のゼミなら協力してくれると思うで。」という総政の人の言葉を信じ、とあるゼミにタッチを売り込みに行ったのである。“社学があるのに何でわざわざ・・・”そう思うかもしれない。でもその時は“とにかく行動を、30日開催なんだぞ”という思いにとらわれ、客観視することはできなかった。しかも、アポなしの飛び込みで。われながら(65)よくやったと思う。

上ヶ原とはまた違う雰囲気におののきながら、(*1)とりあえずタッチのビラを掲示板に貼り付ける。(上ヶ原にはいまだに貼ってある)これで連絡でもあればめつけもん、その程度の気休めに過ぎなかったが。前もって教えてもらっていたゼミの時間に合わせ、事前(というより直前)にゼミの教授に時間をもらえないか相談する。「こういうものを主催しようと考えていまして、スタッフを募集したいのですが。」「うーん、別にいいよ。」と了解を得る。“(66)為せばなる”そんな言葉を思い浮かべながらタッチの説明に。人前で話すのが苦手な私は板井君に説明を頼む。そして、教室内へ・・・。

「・・・というわけで、スタッフを募集しています。」板井君から一通りの説明が終わる。私はただ“は～みんな注目しているよ”とのんきなもの。次に先生と学生から質問が。「どのくらいの人が参加するの?」「え・・・と20人くらいの予定ですが、実数はまだなんとも・・・。」「どんな意義があるのですか?」「・・・障害者の憩いの場を作りたいのです。」とあまりうまく答えが出ない。(67)気持ちばかりが先走り、実体を伴わせていなかったため当然の結果だといえる。そのゼミの人たちは真剣に聞いてくれた。正直“誰も関心をめささないだろう、自分もそうやし”と考えていた自分が(68)恥ずかしかった。もっと内容に深みを持たせよう、ラーメンを食べながら、そう二人で話し合った。

スタッフ集めの奮闘は続く。6月14日、15日とメゾ・マクロメソッドBの授業前にアピールさせてもらう。人が多いし、教室も二つあったため説明しかできなかった。開催日が迫ってきたこともあり、初回は自分たちと、ゼミのみんなの力を借りようということになった。“ほんとにうまくいくのか?”(69)不安は募るばかりだった。

(*1) 人が少ない。山だらけ。校舎きれい。ペットボトル飲料100円。学生の雰囲気も何か違う。パソコンが液晶。自然いっぱい空気おいしい。小鳥の囀りがとてもうるさい。以上。

レクリエーションの内容について(作戦会議)

レクリエーションを開催するわけだが、二人ともあまり知識がなかった。とにかく本を借りて、できそうなものを探す。二人でああじゃないこうじゃないと協議していると、知人の小林君が会話に参加。「おもしろそうやん。」「なら手伝わない?」と強引にスタッフ化。手伝ってもらうことに。

一向に内容が決まらない。なぜなら「何人くらい来るのか」「障害や年齢に関係なくみんな

なが楽しめるものなんてあるのか」という(70)問題が解決できていなかったからである。正直、「(71)無理か？」と何度か、いや、何度も思った。スポーツは制限されることが多く難しい。では何が残るか。クイズ、歌、ダンス、紙芝居（子供向け）その他のゲーム……。なんとなく「すごろくなんてどうやろう？」と思いつく。「自分たちがコマになって、進むねん。で、マスに止まったところに問題とかがある。どうやろ？」「それいいやん！」と賛同の声。これなら何とかみんな参加できそう。人間考えれば何とかなるものだ、そう思った。

後は当日に向けての準備だというわけで、手分けして作業を分担する。私はクイズの本を探したり、当日の小物を作ったりした。板井君の案で、止まる場所を阪急の路線に置き換えてやってみることに。ゼミの子から占いの本を借りたりして着々と準備を進めた。“お金を集めるわけだから、何か記念品や景品があったほうがよいかな”と思い、バイト先で粗品をもらう。これで当日(72)何とかかなという目処はたった。

参加者集め（ネック）

もう一つの問題、参加者の把握。楽泳会の人には何とか参加の協力は得ていた。しかし、理想はまったく新しい人をタッチの場に誘うことである。福祉交流センターで見かけた人にビラを配ったり、呼びかけをしたりしたが、いまいち反応はよくない。とにかく当日だ。そう思いつつ地道に参加者を募った。

第一回タッチ（人間すごろく）

6月30日、ついにタッチの第一回目を決行。色々な道具をもちながら、(73)不安いっばいで交流センターのある三宮に向かう。快く協力してくれたゼミのみんなとともにセンターの教室へ。開始時間の少し前。人がぜんぜんこない。いや、本当に。“タッチ第一回参加者ゼロ”“無駄足”そんな言葉が頭をよぎる。すると楽泳会の中部さん親子と横谷君がきてくれた！何とか開催にこぎつけることができて一安心した。

みんなの協力も会って人間すごろくは順調に進んだ。格マスではペットボトルボーリングや各種クイズを取り揃えていたが、うまく機能するか(74)不安であった。途中テンポが悪くなった場面もあり焦ったけど、何とか乗り切ることができた。「楽しかったよ。」お世辞も含まれるだろうけど、そういわれて(75)とりあえず胸をなでおろした。次はもっと(76)アグレッシブに、そう決意した。

近畿障害者水泳大会（誘導、召集）

少し話が前後するが6月24日、神戸市民福祉交流センターにおいて、第12回の近畿障害者水泳大会が行われた。当日はスタッフとして二人とも協力することに。普段から楽泳会の人たちにはお世話になっているため、手伝えることはなんでもするつもりだった。初めて楽泳会の人たちが大会で泳ぐ姿が見られるということで、(77)楽しみであった。

当日スタッフには大きなひまわりの絵がかかれた T シャツが。早速それを身につけ、私は最初の役割である駐車場の誘導に向かった。地味な仕事だが車で来る人の多さに驚いた。確かに駅からの距離があるため、歩いてくるのは大変だなと考えながら、整理券をひたすら配った。

駐車場の誘導が終わったあとは、選手の招集の係りについた。“召集っていわれても何もわからないや” そう思い同じ召集の人に聞く。「召集ってどんなことをするんですか？」「選手が来ているかどうかの確認や、コースまでの誘導とかやね。要領は見ていたらわかるわ。」と教わる。なるほど、重要な役だ。選手の点呼をとりながら、時折見知った顔に声をかける。「硬くなるなよ。」「一位な一位。」と勝手なことをいう。実際試合では楽泳会の強いこと強いこと。他を寄せ付けない感じがかった。この強さはどこから来るのだろう。会場の熱気もすごく、汗だくだった。

泳大会を実際にこの目で見たのは初めてだった。また今回のように大会運営スタッフとしての参加も初めての経験。以前、車椅子バスケットのオフィシャルをしたときは、ただ凄いなと感じただけだが、今回は(78)スポーツにける情熱を強く感じた。少なからず自分の障害者スポーツに対する(79)意識が変化したからだろうか。“やっぱりスポーツはいいな” そう思った。

第二回タッチに向けて（準備、準備）

二回目は体育館を使うということで、シッティングバレー（*1）をしてみようということになった。念のため、予備に紙芝居も借りておく。市の図書館に入り、児童図書コーナーで必死に紙芝居を選別している自分の姿はあまり想像したくないが、なんとか数冊借りることに成功。「かさ地蔵」「北の果てのペンギン」「くまのプーちゃん」「三匹の豚さんたち」聞いたことのあるものから、まったく知らないもの、微妙に違うものを借りた。後は、当日人が集まるかどうか。(80)前回とまったく同じ不安を抱いていた。

（*1）座って行うバレーボール。ルールはこちらで適当に決めることにした。

第二回タッチ（変則バレーボール）

7月14日、第二回目のタッチを行った。前回と異なりスタッフは三人のみ。使用する体育館も他団体が使っている可能性があるという(81)行き当たりばったりの開催。(82)前回の反省がまったくといっていいほど生かされていない。いいかげんだと思いつつも早速体育館を使わせてもらうことに。幸い他の団体はいなかった。参加者もいなかった。ならばその場で参加者を集めようということで、ロビーで休んでいた人を強引に誘って何とか開催にこぎつけた。

バレーは意外と楽しめたし、みんなも楽しんでくれたと思う。穴がありすぎのタッチだが、(83)新しい知り合いが増えたことが、今回の一番の収穫だと感じた。“ここから輪を広

げられたらいいのにな” そんな思いをこの時は抱いていた。

神戸市障害者スポーツ大会・水泳競技（またも召集）

7月15日、神戸市民福祉スポーツセンターにて、第40回目を迎えた水泳大会が行われた。今回も前回の近畿大会のように、スタッフとして参加。今大会は、以前の近畿大会と異なり、知的障害、精神障害の人も同時に参加していた。このように同じ場所で行われる大会は、全国的にも少ないらしい。召集の仕事はなれたつもりだったが、前回と違いプールサイドでの確認が必要だったため、人が多く、混雑して大変だった。「〇〇さんいらっしゃいませんかー。」「〇〇所属の〇〇さーん!!!」「おーい〇〇!!!」そんな声を何度もだし、くたくたになった。召集のときに「次の試合までにまだ時間ある？」と楽泳会の人に聞かれたときには“もう結構溶け込んでいるな”とか思ったりもした。(84)楽泳会にいることが自然になってきた気がする。

第三回タッチ（私を琵琶湖に連れてって）

7月の28日に三回目のタッチを行った。といっても私は関西選手権のためお休み。板井君、小林君兩名に任せた。以前からこのあたりで何か一つ大きめのイベントをしようという話があった。そこで神戸未来博（*1）にみんなで行くのはどうかという事になった。

最近では(85)楽泳会への参加は当たり前のものとなり、楽泳会の一員として迎えられている、そう感じるようになった。純粹に泳ぐことだけに集中してきたように思う。逆に卒論としては(86)あまり深く考えないようになっていた。ゼミでも最後に少し現状を報告するだけであつたし、この活動をどう論文にまとめるかということは、(87)まったく見えてこなかつた。

（*1）21世紀☆未来体験博が正式名称。7月20日～9月2日まで神戸国際展示場にて。この体験博を通じ、交流をさらに深めようと考えた。

未来博に向けて、その経緯（ビラ作りふたたび）

なぜ未来博へ行くことにしたのか。一つは、今までのタッチの(88)活動が思うように軌道に乗らなかつたから。福祉交流センターを離れないと、ふれあいの幅が広がらないのではないかと感じたから。タッチの活動に一つの区切りをつけたかつたから。色々あるが(89)煮え切らない自分たちの活動に発破をかけたかつたのかもしれない。

板井君が新聞を持ってきて、「これみんなでいかへん？」と持ちかけてきたとき「いいね。」と即答。調べてみると障害者手帳を持っている場合は入場料無料だとわかる。ロボット展等の紹介文を見て「おお、面白そう！行こう行こう！」とさらに乗り気に。善は急げとまた未来博のビラの作成にかかる。ここでアクシデント発生。小林君に頼んだビラの下書きの出来がいまひとつ。お世辞にもよいといえない。（*1）結局みんなで作ることに。少な

い知恵を搾り出した結果、前作（タッチ紹介のビラ）を上回る出来栄え。いい味をかもし出していたように思う。

楽泳会の人や、タッチに参加してくれた人を中心に話をもちかけ、ビラを配る。電話もしたがあまり色よい返事が得られない。(90)手ごたえはあった。行きたいと思わせることは出来たはずだ。でも後一步足りない。自分たちの(91)力不足を痛感した。日頃よく言われる「信頼」について考える。よく会う楽泳会の人たちは簡単に了解してくれる。しかし、あまり知らない人、知られてない人は難しい。信頼してもらえ企画を立てなければ参加人数を増やすのは難しい。その様に感じた。ここが課題だ、そう思う。

（*1）一応小林君もタッチの一員として卒論に参加していたが、本人の興味が離れてしまったため離脱。いまいちタッチの明確さが出せなかったからだろう。でもその後も色々協力は続けてもらっている。

第四回タッチ（神戸未来博）

8月12日、第四回タッチを行う。10時に集合だが一時間ほど早く到着。私には、早く着かないと落ち着かないという性質でもあるのだろうか。時間が過ぎたらほら人が集まる。「おはようございます。い〜天気ですね。」とか話しながらみんなが集まるのを待った。予定ではスタッフ3人、参加者8人の計11人。だが時間になっても二人ほどこない。一人はこられなくなったと連絡が。もう一人を待つため私と小林君が待ち、みんなには先に行ってもらったことになった。

何度か電話をするとようやく連絡が取れる。「ごめん、都合が悪くなって・・・。」これでは参加者は6人。「やはり少ないなあ・・・」その思いが浮かぶが振り払う。さあ、先発隊に追いつこう。よし、その前に腹ごしらえだ、と喫茶店に入る。軽食を取り、急いで板井君たちの後を追った。

会場は思った以上の人ごみ。先にみんな中に入っているとのことで小林君と二人でチケット購入。人目を気にしてしまった・・・。中はなるほど近未来。IDカードなるものも頂戴した。いろんな趣向が凝らしてあった。参加者のみんなとともに色々見て回り、「アイボやアイボ!!!」「アシモは?」とはしゃぐ。今回の目的、「交流を深める」まずは成功だろうか。押し付けにならないように、この(92)楽しさを広めたい。そう思う自分と、“(93)十分な、そろそろ”と思う自分がいた。一応タッチは四回で一区切り。各種データを控えてはいるが、明確な意義を見出してのものではない。(94)卒論への不安は消えない。

振り返り（6月以降の活動について）

8月某日。楽泳会では(95)自分のポジションができはじめた。泳ぐのが楽しくなり、「日本人の誰もが泳げるようになる本」（*1）なるものを購入。論文そっちのけではまりだす。

夏休みに入り、クラブ活動も最後のインカレに向かって、さらに熱が入る。このころは

そちらのことしか頭になかった。

相変わらず卒論のまとめかたがはっきりしない。ゼミでも終わりに現状を報告するだけになっている。(96)他のグループの進み具合を気にしながら、(97)不安と焦りに苛まれるようになった。「どうする？」二人でいつも同じ質問を繰り返していた。

(※1) 鈴木大地監修。

世界移植者大会 (米谷・・・)

私がインカレに行っているころ、板井君はジャパンパラリンピックのスタッフをしていた。その代わりというわけでもないが、8月29,30日の世界移植者大会(※1)のスタッフとして参加することになった。

朝8時に会場(ポートアイランドスポーツセンター)集合。辛い。二日前、引退したばかりの野郎どもと東京ディズニーランドに行った疲れがまだ残っている。早めに家を出たのはいいが電車内でのまさかの寝過ごし。「イマージュなんて聞いていたのが仇となったか？ガングズだったら・・・」そう思うも後の祭り。気がつくと三宮の駅が遠ざかっていった。私はただ呆然と景色を眺めるしかなかった。

根性で何とか競技説明には間に合うことに成功。肩で息をしながら桜井さんを見つける。私が遅れたことを謝ると「君の名前を登録するのが遅れてしまったから、代わりにこれを。」と、「米谷」と書かれた競技役員のしるし(首からぶら下げるやつ)を手渡される。「米谷さんいませんか？」と他の役員。「は、はい。」そのまま返事をしてしまった。よって大会中は米谷さんとして過ごすことに。

私の役はレーンのタイム計測。といっても機械がうまく作動しなかったときの予備のようなもの。自分の計測タイムと機械のタイムが寸分狂いなく一致すると、「俺ってすごい」とか一人で思っている有様。今思えばもっと大会に集中して、参加選手に話を聞けばよかったと(98)後悔している。参加者は小さな子からお年寄りまで、さまざまな国籍の人がいた。障害者スポーツとは多少異なるが、ここにもスポーツの一つの形が発現されていた。スポーツから得られるもの、それは万国共通なのだろう。

帰りがけ、ドナーカードをもらう。だが結局記入せず。いまでも未記入のまま財布に眠ったままである。

(※1) 第13回目を数える世界的スポーツ大会。楽泳会の人は参加していないが、神戸市主催のため、桜井さんに声をかけてもらい役員に。後日ニュースステーションにて一部放映される。「俺映っているって！いやマジで！！見てみーや！！！！」そんなメールを数人に送った気がする。

実習始まる (オーバーワーク)

9月2日から社会福祉現場実習が始まった。週6日、残りの1日に楽泳会へというハードスケジュール。クラブを引退し、余裕が出来るかと思いきや、(99)さらに忙しい。こんなことでほんとに卒論が出来るのかといまさらながらに思う。

楽泳会での練習に続けていっているおかげか、鈴木大地のおかげか、それはわからないが、私もようやくみんなの練習量の半分はついていけるようになった。こうして改めて考えてみると、今では普通に泳ぎ方のコツなどを(100)訊くことが出来るようになっている。以前は遠慮していたのに。やはり周りから見ていただけではいけない、一緒にすることでいわゆる心の距離というようなものが、自分中で縮まったのだと思う。同じように相手も思っていてくれるのだろうか。

日本選手権大会 (IN 広島)

9月の8日と9日、楽泳会は日本選手権に参加するために広島へ。私は全盲のBさんの介助と言う形で同行することに。(101)すごく不安であったが(*1)引き受けてしまったため、しっかりするぞと気合を入れて当日に臨んだ。

新神戸駅に集まる。いったいどの人だろう。私はずっとそわそわしていた。ほどなくBさんとそのご両親が到着。桜井さんから紹介される。「こちらがBさん。大会中、介助してくださる山梶さん。」「よろしくお願いします。」と。私は「いっいえ、何でも言ってくださいいね。」というのがやっと。「果たして自分にそんな大役務まるのかな・・・」そんな(102)不安をかき消すため、試合がんばりましょうねと話し掛ける。「ええ！」そう返事が返ってきた。

新幹線では当り障りのない会話を。年齢は30歳で、生まれつきではなく、途中で視覚を失ったらしい。景色の話など不用意にしないよう(103)気をつけながら、水泳歴についてなどを聞いた。道を歩くとき、手を引いて歩くわけだが、やはりみんなに遅れてしまう。急ぎつつも段差や障害物など、出来る限り会話に盛り込み、注意を促した。(*2)“このひとの目の役を果たすんだ”そのくらいの意気込みだった。

到着してすぐに一日目のプログラムが始まる。私はBさんのウォームアップと一緒についていく。Bさんは25mと50mの自由形に参加する。ともに初日。クラスはB1。(*3)プログラムを確認しながら、「次のグループの後だから・・・まだもう少し時間がありますね。」という感じで試合を待つ。そしてBさんの出番がきた。私も介助ということで付き添う。50mにいたっては合図棒(*4)で合図もしなければならない。(104)とても緊張していた。

結果、25mは5位、50mは3位と大健闘。二人で喜び合った。ただ、25mの試合後、プールサイドに上がるとき飛び込み台に前歯を打たれ差し歯が抜けるアクシデントが発生。私が注意を促さなかったからである。50mの試合でも、合図棒を違うレーンの人にしてしまう大ミスをやらかしてしまった。弁解の余地もない。激しい(105)自己嫌悪に陥った。

一日目のプログラムが終了。Bさんの日程はすべて終わった。楽泳会の面々も好成績を残

し、明日に臨むことに。そして恒例らしい飲み会のために料理屋へ。“食う！食うぞ！”反省もなんのその、そんなことで私の頭はいっぱいだった。Bさんにメニューを紹介しながら、「じゃがバターです。」「えびです。」「ししゃも。」「カニコロッケです。」「ここに水を。」「しゃぶしゃぶですね。」と色々渡す。「こことここにおきますね。」「メニューはいつでも聞いてください。」と絶えず話し掛ける。それが私の役目だと思っていたから。勿論自分もしっかりと食べながら。

少し酔いがまわってきたころ、他のテーブルについた。そこで他の人に話し掛けられた。「すこしB君を甘やかしすぎてないか？」そういわれ“うえっ？”と思う。「今日何回か見ていたけど、自分で出来ることは自分でしてもらわなあかんって。なんでもしてくれる人とおもわれてるで。」例えば、水着を絞って乾かすのをBさんが私に頼んだことや、ものをとってもらっていたことを言われる。自分で出来る、もしくは手伝いがあれば出来ることであつたのだ。なんでもかんでもかわりにすることが必ずしもよいわけではないということか……。少なからず(106)ショックを受けた。「今日見ててわかったと思うけど、B君少し楽泳会でも浮いている感じやろ？障害とか関係なくさ。自分の中に壁をつくってるんやろうな。俺らも最初は話し掛けていたけど、今はあんまし話をしないなあ。少し自分勝手なところあるやん？」言われてみれば確かに思い当たるふしがあつた。でもそのことよりも、言われるまでまったくそんなこと気にしなかった自分に(107)驚いた。「目が見えない」＝「できない」そう(108)勝手に思い込んでしまっていたわけだ。“何て傲慢か！”自分に腹が立った。彼は私に嫌なことははっきり言ったほうがよいといってくれたのだ。だけど私は嫌だなんて全然思っていなかった。“私がするのが当たり前なんだろう”そう思っていたからだ。その後、ある親御さんの言葉が残る。「あなたの子が見る世界はあなたとは違いますって。そういわれてああそうなんだ、違う世界が見えるんだって思ったわ。私には決して見られない世界がね。」

料理屋でおなかいっぱい食べたあと、有名なお好み焼き屋で広島焼きを食べた。(＊5)みんな食べられない分が自然と私のもとへ。結果4枚は食べる羽目に……。外では暴走族が集会をしていた。特攻服らしきもの着て、改造車集めて。さすが、広島。

二日目、前日と同じようにBさんと向かい合えない自分に気付いた。態度を変えたわけじゃない。でも「それは自分でしてください。」そういうべきところは言うようにした。ちょっと驚いていたみたいだが、素直に聞いてくれた。(109)なんだか自分の身勝手さが表れているようで居心地が悪かった。

残りの試合は記録ラッシュ。楽泳会は全国でもその力を如何なく発揮している。みな満足して帰りの新幹線に。Bさんとの別れ際「ほんとにありがとう。」「いえ、お疲れ様でした。」強く握手を交わす。私が今回得たものは何だったのだろうか。

帰りの電車、桜井さんに尋ねてみる。「出来ること、出来ないことの境界って難しいですよね。」どんな答えを返してくれたのだろう。確か「そうだね。本人にしかわからないことってあるから。でも、周りが気付いて、協力できたら、それが一番じゃないかな。」

(※1) 全盲の人を私独りに任す、そういう話だった。引き受けたものの、どのようなことに注すればいいのかよくわからない。一応注意すべきことは伺っていたが、“万が一事故でもあったらどうしよう、へたな発言をして傷つけてしまったらどうしよう”という気持ちでいっぱいの状態。

(※2) 杖を持っていたが、頼りなげだったため声と腕でナビをする。「あと五歩ぐらいでエスカレーターに入ります。」というような感じ。なるべくぶつぶつのある道路を歩いてもらうようにしたが、実際はかなり注意しないとわからないらしい。

(※3) ブラインド1のこと。1から3まである。1は全盲。2,3は弱視の程度で分かれる。ブラインド1に出る選手は真っ黒に塗りつぶした水中眼鏡を着用しなければ失格となる。障害のランクはほかにもいろいろある。

(※4) 先端にスポンジのついた伸び縮みする棒。主にブラインドの選手がターン、もしくはゴールする時、数メートル手前で頭をたたいてやる。そうすることで壁が接近していることを伝えるのだ。

(※5) 食べた後、明日試合があるにもかかわらずさらに食べ歩く。初日にモッズが、二日目にミスチルがいたらしい。ミスチルは会えなかった。残念！

プリンター購入 (エプソン PM-780)

9月29日のボランティアサミットに各プロジェクトの経過発表を行うことに。一週間ほど前から活動をポスターにまとめる。デジタルカメラの写真を貼ったかったので急遽プリンターを買うことに。店員に進められるがままに購入。早速印刷してみる。「これでよし。」そうつぶやきスイッチオン。「ガーガガガ、ウィンウィンウイーン」かなり派手な音を立てながら印刷開始。「ガガガッ！ガッ……(反応なし)」「なにい？」途中で止まりやがった。何度しても同じ結果に。仕方なく再インストール。「ガガガガガガ……」また止まる。しかも途中まで印刷して……。“くそう、なぜだ？”マニュアル読んでもわからない。そしてとうとう最終手段パソコンの再セットアップに手を出す。なにか不必要なものが入っているからだ、そうに違いないと判断。再セットアップ開始……。二時間後、再び挑戦。撃沈。

とうとうサービスセンターに問い合わせる。「すいません、かれこれこうなるのですが……。」「パラレルケーブルで試してみてください。」ケーブルをもらいに購入店へ。「USBだとうまくいかない場合があるんですよ。」そんなものなのか？で、かえって試す。「ウィンウィンウイーン」心なしかスムーズ。ようやく完成。気がついたらインク残量が半分くらいに。疲れた……。

後日談だが購入から二週間とたたず同社の新型が発売された。当然私のやつは値下げされ、店頭からその姿を消していった……。

ボランティアサミット（中間発表）

余計な苦勞をかけて作ったポスターを基に、タッチの活動や、楽泳海の活動を報告。しかし、真夜中だったので何を言ったのかよく覚えていない。その場で先生から文献を読むように指示される。「今から？」そう思いつつ、そろそろ論文にまとめなければ、と(110)焦りだす自分がいた。

楽泳会主催バーベキュー（狂牛病を吹っ飛ばせ）

10月28日、恒例行事らしいバーベキューに誘っていただく。当日は板井君の車に乗って三田の山奥へ。誰かの別荘で行うらしい。「パラリンピックの話とか、楽泳会に入ったきっかけとか聞いておこうや。」ということで、それとなく話をしたりもした。

終始和やかな雰囲気だった。ここで思ったことの一つに、楽泳会では親御さんたちのバックアップが優れているということがある。ここは大きな強みだと感じた。

帰りの車内でどのように卒論をまとめるかに二人とも大いに(111)悩む。「とりあえず今度家で徹底的に考えよう。」そう提案して、文章にすることを開始する。文献を読むのと平行しての作業はあまりはかどらなかったが、そうも言っていられない。コブクロを見ながら(112)不安でいっぱい自分がいた。

日本身体障害者水泳連盟研修会（幸せの村で）

11月の10、11日に研修会に参加する。桜井さんに誘われ、指導方法などもっと知りたかった私は研修に参加することに。講義と実技があり、講義では障害別の泳法や、注意点について。実技では模擬体験や、初めて水に入る人にはどう接すればいいのかなどを学ぶ。

“もうすっかり秋やな・・・(113)果たして卒論はうまくいくんかいな。” 広いお風呂に一人で浸かりながら考える。どうまとめようかという(114)悩みが消えることはない。活動を続けてきた自負はある。でもそこから(115)どう主張すればいいのかが手探り状態だった。

・一日合宿（題名決定）

一晩かけて二人で卒論の題名決定。「レジャー・レクリエーションスポーツから競技スポーツまで～神戸楽泳会障害者水泳チームとのかかわりから～」というもの。ここに自分たちの活動を記し、形にしようということになった。

7・結果と考察に代えて

本論から抽出したキーワードを行＝時期、列＝カテゴリーとしてまとめた。その際、板井、山梶、そして両名を合わせたものの三種類に分け、それらをコレスポネンス分析にかけた。活動時期を通じた行動、感情の変遷を異なる視点で見つめるためである。

その結果を踏まえ、考察の形で障害者スポーツ、レクリエーションに関わった自分たちをストーリーとして展開する。

I・コレスポネンステ이블における列、行の説明

II・分析結果（板井）

III・分析結果（山梶）

IV・分析結果（板井+山梶）

V・考察（ストーリー）

I・コレスポネンステ이블における列、行の説明

行：時期

- 1：3回生 10月～12月
- 2：市役所訪問（1月25日）
- 3：楽泳会初訪問（2月17日）
- 4：2・24（2月24日）
- 5：モニュメントマップ時代（3・4月）
- 6：タッチの構想（4月後半）
- 7：タッチ準備期間（5月）
- 8：水泳教室（5月8日～6月8日）
- 9：近畿障害者水泳大会（6月24日）
- 10：第1回タッチ（6月30日）
- 11：第1回タッチを終えて（7月前半）
- 12：第2回タッチ（7月14日）
- 13：神戸市障害者水泳大会
- 14：第3回タッチ（7月28日）
- 15：第4回タッチ準備期間（7月から8月前半）
- 16：第4回タッチ（8月12日）
- 17：世界臓器移植者大会（8月29・30日）
- 18：日本選手権（9月8・9日）
- 19：山梶実習（9月）
- 20：板井実習（10月）
- 21：11月

列：カテゴリー

- A：立木先生に対する不満
- B：桜井さんに対する依存
- C：手伝ってくれた人に対する感謝
- D：小林に対する不満
- E：障害者スポーツへの興味
- F：障害者スポーツへの理解
- ☆活動に対する満足☆
- G：タッチでの活動
- H：楽泳会での活動
- I：卒業論文の活動を通じて
- ☆活動に対する決意☆
- J：タッチでの活動
- K：楽泳会での活動
- L：卒業論文の活動を通じて
- ☆活動に対する不安☆
- M：タッチでの活動
- N：楽泳会での活動
- O：卒業論文の活動を通じて
- ☆活動に対する焦り☆
- P：タッチでの活動
- Q：楽泳会での活動
- R：卒業論文の活動を通じて
- ☆活動に対する消極的姿勢☆
- S：タッチでの活動
- T：楽泳会での活動
- U：卒業論文の活動を通じて
- ☆活動に対する辛さ☆
- V：タッチでの活動
- W：楽泳会での活動
- X：卒業論文の活動を通じて
- ☆活動に対する甘さ☆
- Y：タッチでの活動
- Z：楽泳会での活動
- α：卒業論文の活動を通じて

コーレスポネンシ分析

出典

II・分析結果 (板井)

CORRESPONDENCE

Version 1.0

by

Data Theory Scaling System Group (DTSS)

Faculty of Social and Behavioral Sciences

Leiden University, The Netherlands

コーレスポネンシ テーブル

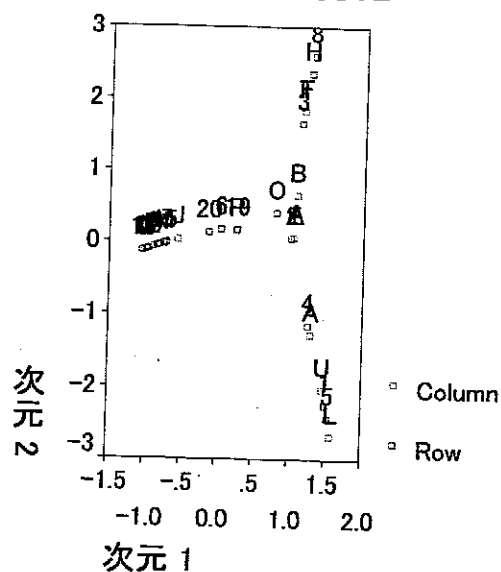
行	列							
	A	B	C	D	E	F	G	H
1	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	2	0	0	3	0	0	0
3	0	1	0	0	0	3	0	2
4	2	0	0	0	0	0	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	0	0	0	0	0	2
9	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	4	1	0	0	1	0
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	4	0	0	1	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0
15	0	0	0	0	0	0	0	0
16	0	0	1	0	0	0	4	0
17	0	0	0	0	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	0	0	0
19	0	0	0	0	0	0	0	0
20	0	0	0	0	0	0	0	0
21	0	0	0	0	0	0	0	0
周辺	2	3	5	5	3	3	6	4

	列							
	I	J	K	L	M	N	O	P
1	0	0	0	0	0	0	0	0
2	1	0	0	0	0	0	2	0
3	0	0	0	0	0	0	2	0
4	0	0	0	0	0	0	1	0
5	0	0	0	1	0	0	0	0
6	0	2	0	0	0	0	1	0
7	0	4	0	0	0	0	0	1
8	0	0	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	1	0	0	1
11	0	1	0	0	1	0	0	1
12	0	0	0	0	1	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0
15	0	1	0	0	0	0	0	1
16	0	0	0	0	0	0	0	1
17	0	0	0	0	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	0	0	0
19	0	0	0	0	0	0	0	0
20	0	0	0	0	1	0	1	0
21	0	0	0	0	0	0	0	0
周辺	1	8	0	1	4	0	7	5

行	列							
	Q	R	S	T	U	V	W	X
1	0	0	0	0	2	0	0	0
2	0	1	0	0	1	0	0	0
3	0	0	0	1	0	0	0	0
4	0	0	0	0	1	0	0	0
5	0	0	0	0	3	0	0	0
6	0	2	0	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	1	0	0
8	0	0	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0	2	0	0
11	0	0	1	0	0	1	0	0
12	0	0	0	0	0	1	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	3	0	0
15	0	0	0	0	0	0	0	0
16	0	0	1	0	0	0	0	0
17	0	0	0	0	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	0	0	0
19	0	1	0	0	0	0	0	0
20	0	1	0	0	0	1	0	0
21	0	0	0	0	0	0	0	0
周辺	0	5	2	1	7	9	0	0

行	列			
	Y	Z	A	周辺
1	0	0	0	2
2	0	0	2	12
3	0	0	0	9
4	0	0	0	4
5	0	0	0	4
6	0	0	0	5
7	1	0	0	7
8	0	0	0	2
9	0	0	0	0
10	2	0	0	12
11	0	0	0	5
12	0	0	0	7
13	0	0	0	0
14	0	0	0	3
15	0	0	0	2
16	0	0	0	7
17	0	0	0	0
18	0	0	0	0
19	0	0	0	1
20	0	0	0	4
21	0	0	0	0
周辺	3	0	2	86

行ポイントと列ポイント
対称的正規化



CORRESPONDENCE

Version 1.0

by

Data Theory Scaling System Group (DTSS)

Faculty of Social and Behavioral Sciences

Leiden University, The Netherlands

コレスポネンス テーブル

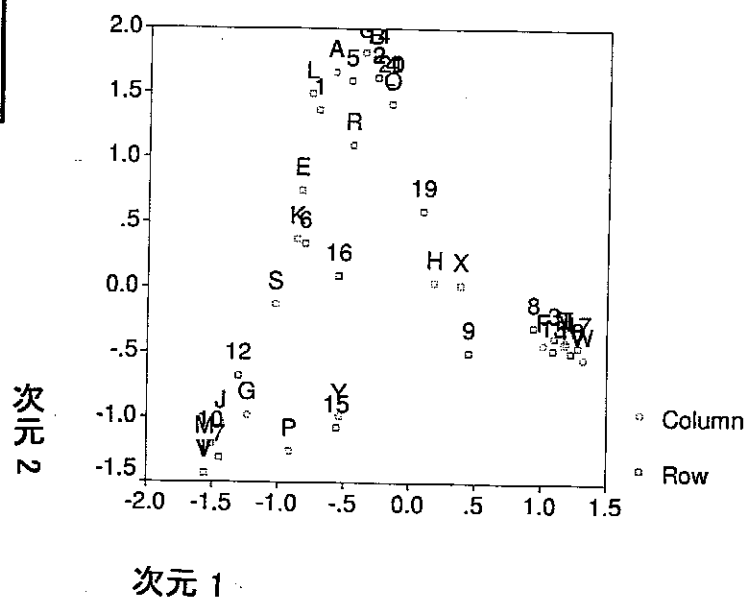
行	列							
	A	B	C	D	E	F	G	H
1	1	0	0	0	1	0	0	0
2	0	1	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	13	0	0
5	2	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	2	0	0	0
7	0	0	0	0	0	0	1	1
8	0	0	0	0	0	1	0	1
9	0	0	0	0	0	2	0	1
10	0	0	0	0	0	0	2	0
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	0	0	0	1	0
13	0	0	0	0	0	1	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0
15	0	0	0	0	0	0	0	0
16	0	0	0	0	0	1	1	0
17	0	0	0	0	0	0	1	0
18	0	0	0	0	0	0	0	0
19	0	0	0	0	0	4	0	0
20	0	0	0	0	0	1	0	1
21	0	0	0	0	0	0	0	0
周辺	3	1	0	0	3	23	6	4

行	列							
	I	J	K	L	M	N	O	P
1	0	0	0	1	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	4	0
3	0	0	0	0	0	6	1	0
4	0	0	0	0	0	0	2	0
5	0	0	0	0	0	0	1	0
6	0	1	1	0	0	0	0	0
7	1	3	0	0	2	0	0	1
8	0	0	0	0	0	4	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	1	0	0	2	0	0	0
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	0	1	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	1	0
15	0	0	0	0	0	0	0	2
16	0	0	0	0	0	0	1	0
17	0	0	0	0	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	4	0	0
19	0	0	0	0	0	0	1	0
20	0	0	0	0	0	0	2	0
21	0	0	0	0	0	0	2	0
周辺	1	5	1	1	5	14	15	3

行	列							
	Q	R	S	T	U	V	W	X
1	0	1	0	0	0	0	0	0
2	0	1	0	0	1	0	0	0
3	0	0	0	2	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0	0
5	0	2	0	0	1	0	0	0
6	0	2	2	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	2	0	0
8	0	0	0	1	0	0	0	2
9	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0	0	0	0
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	2	0	0	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	1	0	0	0
15	0	0	0	0	0	0	0	0
16	0	0	1	0	0	0	0	1
17	0	0	0	1	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	0	2	0
19	0	2	0	0	0	0	0	1
20	0	0	0	0	0	0	0	0
21	0	0	0	0	0	0	0	0
周辺	0	8	5	4	3	2	2	4

行	列			
	Y	Z	A	周辺
1	0	0	0	4
2	0	0	0	7
3	0	0	0	22
4	0	0	0	2
5	0	0	0	6
6	0	0	0	9
7	1	0	0	11
8	0	0	0	9
9	1	0	0	4
10	0	0	0	5
11	0	0	0	0
12	0	0	0	4
13	0	0	0	1
14	0	0	0	2
15	0	0	0	4
16	0	0	0	4
17	0	0	0	1
18	0	0	0	10
19	0	0	0	6
20	0	0	0	2
21	0	0	0	2
周辺	2	0	0	115

行ポイントと列ポイント
対称的正規化



CORRESPONDENCE

Version 1.0

by

Data Theory Scaling System Group (DTSS)

Faculty of Social and Behavioral Sciences

Leiden University, The Netherlands

コレスポネンス テーブル

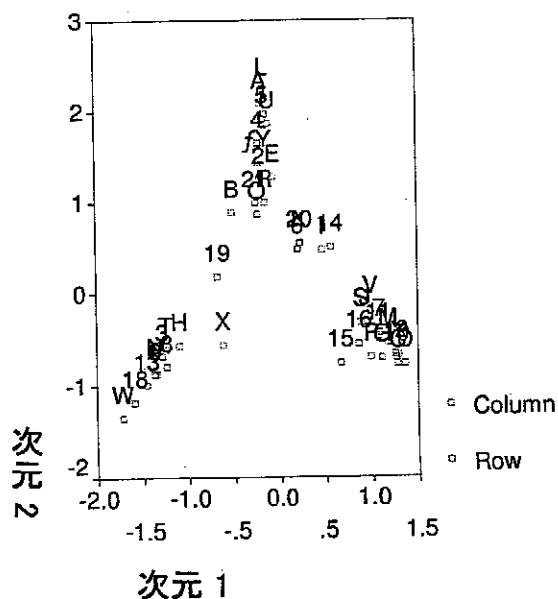
行	列							
	A	B	C	D	E	F	G	H
1	1	0	0	0	1	0	0	0
2	0	3	0	0	3	0	0	0
3	0	1	0	0	0	16	0	2
4	2	0	0	0	0	0	0	0
5	2	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	2	0	0	1
7	0	0	0	0	0	0	1	0
8	0	0	0	0	0	1	0	3
9	0	0	0	0	0	2	0	1
10	0	0	4	1	0	0	3	0
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	4	0	0	2	0
13	0	0	0	0	0	1	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0
15	0	0	0	0	0	1	1	0
16	0	0	1	0	0	0	5	0
17	0	0	0	0	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	4	0	0
19	0	0	0	0	0	1	0	1
20	0	0	0	0	0	0	0	0
21	0	0	0	0	0	0	0	0
周辺	5	4	5	5	6	26	12	8

行	列							
	I	J	K	L	M	N	O	P
1	0	0	0	1	0	0	0	0
2	1	0	0	0	0	0	6	0
3	0	0	0	0	0	6	3	0
4	0	0	0	0	0	0	3	0
5	0	0	0	1	0	0	1	0
6	0	3	1	0	0	0	1	0
7	1	7	0	0	2	0	0	2
8	0	0	0	0	0	4	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	1	0	0	3	0	0	1
11	0	1	0	0	1	0	0	1
12	0	0	0	0	2	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	1	0
15	0	1	0	0	0	0	0	3
16	0	0	0	0	0	0	1	1
17	0	0	0	0	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	0	0	0
19	0	0	0	0	0	0	1	0
20	0	0	0	0	1	0	3	0
21	0	0	0	0	0	0	2	0
周辺	2	13	1	2	9	10	22	8

行	列							
	Q	R	S	T	U	V	W	X
1	0	1	0	0	2	0	0	0
2	0	2	0	0	2	0	0	0
3	0	0	0	3	0	0	0	0
4	0	0	0	0	1	0	0	0
5	0	2	0	0	4	0	0	0
6	0	4	2	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	3	0	0
8	0	0	0	1	0	0	0	2
9	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0	2	0	0
11	0	0	1	0	0	1	0	0
12	0	0	2	0	0	1	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	1	3	0	0
15	0	0	0	0	0	0	0	0
16	0	0	2	0	0	0	0	1
17	0	0	0	0	0	0	0	0
18	0	0	0	0	0	0	2	0
19	0	3	0	1	0	0	0	1
20	0	1	0	0	0	1	0	0
21	0	0	0	0	0	0	0	0
周辺	0	13	7	5	10	11	2	4

行	列			
	Y	Z	A	周辺
1	0	0	0	6
2	0	0	2	19
3	0	0	0	31
4	0	0	0	6
5	0	0	0	10
6	0	0	0	14
7	2	0	0	18
8	0	0	0	11
9	0	0	0	3
10	3	0	0	18
11	0	0	0	5
12	0	0	0	11
13	0	0	0	1
14	0	0	0	5
15	0	0	0	6
16	0	0	0	11
17	0	0	0	0
18	0	0	0	6
19	0	0	0	8
20	0	0	0	6
21	0	0	0	2
周辺	5	0	2	197

行ポイントと列ポイント
対称的正規化



V・考察（ストーリー）

A：立木先生に対する不満

プロジェクト・卒論を進めていくうえで、立木先生に主導権を握られることに対しての不満は高まった。

・板井

2 6) 立木先生に対する反感は大きくなっていった。

2 7) することもせずに、立木先生に対してただ文句ばかりをいっている子供だった。

・山梶

2) 自分たちの意思と言うよりも、先生の勢いに押し切られる感じとなった。

3 7) 先生の一方向的ともいえる発言に内心で反論を唱えていた。

4 1) せっかく用意した資料が無駄になったと考えると少しやりきれない思いだった。

B：桜井さんに対する依存

楽泳会への参加、卒論自体の相談など、幅広くお世話になっていくうちに私たちの桜井さんに対しての依存度は高まっていった。

・板井

1 2) 桜井さんと話すことで自分達の道がぱっと開けたように思えた。

1 3) それまでもややもやしていたものを桜井さんが振り払ってくれたような気がした。

2 2) 桜井さんに対する信頼度・依存度というものが急上昇した。

・山梶

9) 新しいことに取り組むことで、心に熱いものが生まれ始めた。

C：手伝ってくれた人に対する感謝

自分たちが一番苦しいときに手伝ってくれる仲間に対して感謝の気持ちは高まる。

・板井

4 8) 新メンバーの加入（小林）がありがたかった。

5 1) 4人のゼミ生が手伝いに来てくれたことに感謝。（第1回タッチ）

5 5) ゼミ生の仲間がこんなに助けてくれている。（第1回タッチ）

5 6) ゼミ生に対して熱いものがこみ上げた。（第1回タッチ）

7 7) メンバーを抜けても、手伝ってくれる小林に対してありがたかった。

・山梶

該当なし

D：小林に対する不満

メンバー内での確執。メンバー内で全員が同じ立場、気持ちを共有しなければならない

と思っていた。

・板井

4 9) 小林が本気でやってくれるのか、という不安が残る。

7 2) プロジェクトメンバー内での確執。

7 3) 小林にもちゃんと1/3の仕事をしてほしいという気持ちが強かった。

7 5) 小林の態度が許せない。

7 6) 小林に対する怒り爆発。

・山梶

該当なし

E: 障害者スポーツへの興味

障害者スポーツというものに興味を持ち、プロジェクトを立ち上げていく。

・板井

9) 桜井さんとの話の中にパラリンピックの話があった。

1 0) パラリンピック期間中の選手のモチベーションは高かった。

1 1) 障害者スポーツの指導方法も近年、飛躍的に進歩している。

・山梶

1) スポーツ・障害者という二点の関心から、「障害者スポーツ」に取り組むことにした。

1 4) 私たちが集まったのは障害者スポーツに興味があったからである。そのことを思い出し初心に戻ることにした。

4 6) 楽泳会よりも敷居の低い、障害者レクリエーションをやってみようと考えた。

F: 障害者スポーツへの理解

障害者スポーツの中に身を置くことで、理解は深まっていった。

・板井

1 7) 楽泳会の人たちは皆いきいきとしていた。

1 8) いきいきしているのを実感できた。

1 9) 楽泳会の選手は速さを求めて泳いでいるということに驚かされた。

・山梶

1 4) 楽泳会の人たちは、私の想像以上の競泳力を持っていた。

1 6) 気のいい人ばかりで、私の心配は杞憂に終わった。

2 2) 障害=劣っているという先入観がどうしてもあったのかもしれない。

2 3) 私は偏見を持った人間ではないはずだという自負があった。

2 4) 障害について考えず自分の意識から除くことで、問題意識を持たないという実に曖昧な自分がそこにいた。

2 5) 障害について考えることが、本人の前では失礼なのではないかと思い考えなかった。

- 27) 私は障害者の表面しかわかろうとしていないのではないだろうか。
- 28) 私は障害者のことを深くわかろうとする努力を放棄していないだろうか。
- 29) 障害があるのに高いレベルで泳げるなんてすごい。
- 30) 障害など関係ない、その個人がこれほど高いパフォーマンスを発揮していることがすごいのである。
- 31) リハビリの延長だという自分の意識は、楽泳会の人たちと出会って大きく変化した。
- 32) 今まで私は障害者スポーツを競技スポーツとして捉えていなかった。
- 33) 楽泳会に参加することで、障害者スポーツに対する考えを改めた。
- 54) 楽泳会ではコミュニケーションに困ることはなかった。そのため障害について意識することは少なくなっていた。
- 78) 障害者水泳大会を目の当たりにしたことで、以前よりもスポーツにかける情熱を強く感じた。
- 79) 少なからず自分の障害者スポーツに対する意識が変化したように思う。
- 84) 私は最初、勝手に自分は部外者なのではと思っていたが、今では楽泳会にいたことが自然になってきた気がする。
- 85) 楽泳会に参加するのが当たり前になっていた。
- 95) この時期になると楽泳会の中でも自分のポジションというものを感じられるようになった。
- 106) 何でも代わりにすることが、必ずしも本人のためにならないと言われ、少なからずショックを受けた。
- 107) Bさんの性格についてまったく無頓着であったと言う事実到我ながら驚いた。
- 108) 「目が見えない」＝「出来ない」そう勝手に思い込んでいたわけだ。
- 109) 話を聞いて、翌日から態度を変える自分自身が身勝手に思えてならなかった。

☆活動に対する満足☆

プロジェクトを通して、企画、立案、そして実施や体験。様々な活動を行ってきた。その中で、自分たちの意識が変わってくことに気がついた。満足の行く方向へと流れが進んだとき、私たちはこれらの活動に、自信と充実感を持つことが出来たのである。

G: タッチでの活動

・板井

- 52) 短期間にしては良い企画が出来たと自負。(第1回タッチ)
- 66) 参加者全員で楽しめた。(第2回タッチ)
- 78) 参加者は楽しんでくれた。(第4回タッチ)
- 79) 参加者とわきあいあいと過ごすことが出来た。(第4回タッチ)
- 80) わきあいあいと楽しいムードで終えることが出来た。(第4回タッチ)

83) とりあえず終えられたことで、ほんと安堵感を得ていた。

・山梶

61) ビラの出来がよかったため、私の中ではうまくいくのではないかという気持ちが膨らんでいた。

65) 結果はどうあれ、ここ数日の行動は賞賛に値すると思う。

75) 楽しめたと言う言葉を聞いてとりあえず胸をなでおろすことが出来た。

83) 不備は数え切れないほど見つかるが、その経験、そして新しい知り合いが増えたことは大きな収穫だと感じた。

90) 参加を募るにあたって、来てくれそうだという手応えはあった。

92) みんなで楽しむと言う楽しさをもっと多くの人に広めたいと思った。

H: 楽泳会での活動

・板井

14) 迷っていたけど、市役所訪問へ来て良かったなー。

20) 楽泳会の皆さんは私たちを温かく包み迎えてくれたような気がした。

21) 楽泳会の皆さんの優しい態度で緊張が取れた。

32) Aさんが楽しそうにしているのを見て、私もうれしかった。(水泳教室)

33) 障害者の人と距離が近づいた気がした。(水泳教室を終えて)

・山梶

42) 私は泳ぐことがとても楽しくなってきた。なぜなら、楽泳会の人たちともうちとけてきていたし、水泳がからだに与える効果を自らの体で感じていたからである。

53) Aさんの上達が実感できたため、私は一緒にとても喜んだ。

77) 楽泳会を大会で目にすることが大変楽しみであった。

100) いつのまにか遠慮して聞かない、そんなことが自分の中でなくなっていた。改まって振り返ってみて、変に気を使わなくなってきたのに気付く。

I 卒業論文の活動を通じて

・板井

該当なし

・山梶

58) 私は忙しい中で活動をしていることに満足感を抱いていた。

☆活動に対する決意☆

何をはじめるとしてもそのきっかけが必ずある。何かをはじめるときの決意、目的を達成するための決意。私たちは心に思い描いたことを実現できるように取り組もうと考えていた。

J: タッチでの活動

・板井

39) 水泳教室は草の根的なものだった。

40) 障害者の人たちが活動範囲を広めるきっかけとなり、多くの人が交流できる場を提供したい。

41) 自分達がやりたいことが決まれば、善は急げである。

42) 私的事情などで忙しいなかではあったが、後ろを振り返ることなく、進んでいった。

44) 自分達のおしりに火をつけるためにもタッチ1回目の開催日を早めに設定した。

46) 第1回タッチに向かって張り切っていた。

60) ビラに開催日時を書いてしまったので止めるわけにはいかない。

71) 第4回タッチに向けてよい案が浮かび、善は急げ。

・山梶

49) 出来るかどうかよりもやることに意義があるとそう思い込み、とりあえずやってみるという気持ちだった。

63) ふれあいを気軽に行える「場」の創造。そのような理想が私にはあった。

66) 行動に移せばそこには結果がついてくる。

76) 私たちにはアグレッシブさが足りない。

K 楽泳会での活動

・板井

該当なし

・山梶

39) とりあえず今は楽泳会に参加し、もっと知ることから始めようと思った。

L: 卒業論文の活動を通じて

・板井

25) 震災モニュメントウオークにすっかり心を奪われた。

・山梶

21) 初級障害者スポーツ指導員の資格を得ることで、本格的に障害者スポーツに取り組む意志を固めた。

☆活動に対する不安☆

障害者スポーツに関わることで、言いようのない不安が私たちを襲った。レクリエーションのこと、楽泳会でのこと、卒論のこと。これらの不安は、私たちの自信のなさが現われているとも言えるだろう。最初に物事に取り掛かるという不安と、先のわからぬ漠然と

した不安、人と付き合うことへの不安がよく見られる。

M：タッチでの活動

・板井

50) 準備段階でうまくいなくてとても不安。

65) うまくいか不安。(第2回タッチ)

74) プロジェクトがうまくいっていない。

85) 2人が交互に実習に行って、2ヶ月間プロジェクトは休眠。

・山梶

69) スタッフ集めが不発に終わった私たちは、うまくいくのかという不安に苛まれていた。

71) レクリエーションを行う上での制限の多さに、一時あきらめかけたこともあった。

73) 当日どれだけ参加してくれるのか、楽しんでもらえるか不安いっぱいであった。

74) レクリエーションを滞りなく進めることができるかどうか不安であった。

80) 前回開催のときと全く同じ不安を感じていた。

N 楽泳会での活動

・板井

該当なし

・山梶

12) 新しく会う人、それも障害を持つ人たちに会うということに不安を感じていた。

13) 変な目で見てしまわないか、変な目で見られないか不安だった。

15) うまく付き合えるのかという不安があった。

17) 私にはまだ、話すことに遠慮があった。

18) 障害について触れることは、いい関係を崩すことにならないかと思い触れなかった。

26) 障害のある部位を見ることで、相手に不快感を与えてしまうのではという思いから、

50) 重度の障害を持つ方に対して、私は大変緊張していた。

51) 私は初めて会う人、しかも、十分な技術を有していないと自分の未熟さを理解していたため、体の硬さはなかなか抜けなかった。

52) Aさんは麻痺のため、話をするのは困難であった。意思の疎通がうまくいっているのか不安を感じていた。

55) 会話という手段を失った私は、いかにコミュニケーションを会話に頼っていたか実感した。

102) 私にそんな大役が果たせるのだろうかと不安であった。

103) 不用意に景色の話などしないようにしたほうがいいのだろうかと思っていた。

104) 私も試合にかかわる、しかも他の人の補助をするのである。緊張は嫌でも高まっ

た。

107) 全盲の B さんに付きっ切り、言い換えれば私を信頼して頼んでくださったわけであるため、すごく不安を感じていた。

O: 卒業論文の活動を通じて

・板井

3) 「障害者スポーツ」に決まっても、そこから何をすれば良いか全くわからなかった。

4) 市役所訪問に際して、何をするかすら決まってないのに企画書なんて書けない。

15) 障害者スポーツの何をするかという所で決めあぐねていた。

16) 何をするか、決まってないんです。

24) 2・24の時点で、私たちは何をするか、全く決まっていなかった。

29) 自分達の核となる考えがなかった。

87) どう卒論に持っていくか、という気持ちが強まる。

・山梶

4) 何をするのか、したいのかがはっきりしていない。

8) いよいよプロジェクトを始動させるのだと緊張した。

7) 自分の気持ちも十分に整理できていなかったため、返って相手に失礼にならないかと感じていた。

10) 果たしてうまくやることが出来るのか不安であった。

20) 障害者問題というものに、我々が取り組んでいけるのか不安を感じた。

34) 卒業論文と考えると、楽泳会に参加していても、そこからどうすればいいのかが見えてこなかった。

35) 私たちは卒業論文として成り立つ、明確な方向性を求めている。

36) 卒業論文の方向性が見えてこない状況であった。

87) 論文の形は全く見えてこないという状況が続いた。

94) 各種データはあるものの、それをどうまとめていくのかという不安は消えなかった。

97) ゼミでの報告も毎回同じような現状しか発言できていないため、不安と焦りは増えていく一方であった。しかし、どう対処すべきかわからないままであった。

111) 今までの活動をどのように論文にまとめるか、私たちは悩んだ。

112) 作業が思うようにはかどらない。不安でいっぱいの自分がそこにいた。

113) 果たしてうまくいくのだろうか。そう考えることが多くなっていた。

114) どのようにまとめようか悩み続けた。

☆活動に対する焦り☆

私たちの思うように物事が進まず、時間だけがただ過ぎていく。核となるようなはっきりしたビジョンができていない。そういった気持ちの表れが焦りとなって出てきている。

P: タッチでの活動

・板井

4 3) ゼミ内のほかのグループに遅れをとっている気がしていた。

5 3) 時間が近づいてきても誰も来ない焦り。(第1回タッチ)

6 3) 私たちの立てた目標を達成することが出来ない。

6 9) 第2・3回の開催は消化しただけに過ぎなかった。

8 1) 4回目にしても自分達の立てた目標に全く近づいていなかった。

・山梶

6 4) 時間の経過とともに私たちの焦りは募っていった。

8 8) レクリエーション活動は、1~3回の開催は思うような軌道に乗っていなかった。

8 9) レクリエーション活動を意義ある形にするためにも、悩んでばかりで煮え切らない自分たちに発破をかけたかった。

Q 楽泳会の活動

・板井

該当なし

・山梶

該当なし

R 卒業論文の活動を通じて

・板井

6) 市役所訪問の際、他のグループのプレゼンを聞きながら、自分達の番が近づくにつれて、焦りは高まる。

2 8) 早くしないとという気持ちが高まっていった。

3 8) 自分達の考えで何かを始めなければならない、という気持ちになっていった。

8 4) とりあえずそれまでの活動をまとめる。(中間発表)

8 8) プロジェクトは自然消滅的に終わり、私たちの意識は卒論モードに。

・山梶

3) 自分のやりたいことに自信がもてないまま、何かしておかないとという気持ちからプロジェクトを立ち上げた。

6) きちんと説明できる自信がないためハラハラしていた。

4 0) やるべきことをやってから考えることとした。

4 3) クラブ活動と就職活動にはさまれ、楽泳会への参加の時間をつくるのが大変であった。

4 5) 楽泳会の参加は楽しいものであったが、何かを学び取ろうとするあまり私は少し行

き詰まりを感じていた。

47)「こと起こし」その言葉に重圧を感じて焦っていた。

96)ゼミの他グループの進み具合が気になっていた。

110)文献を読むように指示され、いまさらながら焦りだした。

☆活動に対する消極的姿勢☆

時間に追われ疲れているときや、明確な活動の指針がわからなくなったときなどに、思考が停止してしまう場面が見られた。

S：タッチでの活動

・板井

62)参加者はあまり来すぎてもらっても困る。

82)目標に対する意識が薄れてきた。

・山梶

48)障害者対象レクリエーションというものの難しさを深く考えることはなかった。

68)自分の考えを他の人に対して当てはめていたことを恥じた。

81)前もって十分な準備のない、いきあたりばったりという感じがあった。

82)参加人数の把握、ふれあいの充実など前回の反省を活かすことが出来ていなかった。

93)今までの活動でもう十分だと思う自分がいた。

T：楽泳会での活動

・板井

34)楽泳会や水泳教室にはただ参加しているだけであった。

・山梶

11)神戸まで出かけることが億劫であり乗り気にはなれなかった。

26)障害のある部位を見ることで、相手に不快感を与えてしまうのではという思いから、あまり見ないようにしようとしていた。

56)ジェスチャーや意志の確認を頻繁に行ったが、こちらの一方的な解釈に陥ってしまった感是否めない。

98)せっかく世界中の人が参加していたのだから、もっと多くの話を聞いておくべきだったと後悔している。

U：卒業論文の活動を通じて

・板井

1)自分達は何をしていくか、真剣に考えていなかった。

2)なんとなくではあるが、「障害者」、「スポーツ」という所に興味を持ち始めた。

- 5) 市役所訪問へ行くかどうか、迷っていた。
- 23) 2・24に自分から参加という気持ちは全くなかった。
- 35) 私たちはそれまで立木先生や桜井さんに何か与えてもらうのを待っていた。
- 36) 自分達のガンとした意見をもっていれば・・・。
- 37) 自分達の意見があれば、反対を押し切って強行できることも出来ただろう。
- ・山梶
- 5) 現場に入り込みさえすれば何か見つかるだろうという受身の考えであった。
- 44) 時間に追われ、一時的に卒業論文の問題を棚上げしてしまった感じは否めない。
- 86) 楽泳会への参加を卒業論文として考えないようにになっていた。

☆活動に対する辛さ☆

失敗することの辛さ、自分の心を見つめ直すことの辛さ、先行きの見えない辛さなど、活動をすることで多くの苦痛を強いることもあった。しかし、それで立ち止まらずに次の行動を起こすことが大切だと言える。

V: タッチでの活動

・板井

- 47) スタッフ募集の働きに全くの応答がなく、落胆してしまった。
- 54) 人集めに無我夢中になって走り回る。(第1回タッチ)
- 58) 月に2回の開催は大変だと実感。(第1回タッチ)
- 59) 過密すぎるスケジュールを立ててしまった。(第1回タッチ)
- 64) 参加者集めに苦労。(第2回タッチ)
- 67) 人数が集まらなかった。(第3回タッチ)
- 68) 事前の連絡には手応えがなく、人数集めに苦労。(第3回タッチ)
- 70) 第2・3回開催はビラに予定日時を記載したのでせざるを得なかった。
- 75) 小林の態度が許せない。
- 86) プロジェクトを進めることは出来ず、人数の少なさを実感した2ヶ月。

・山梶

- 60) レクリエーションの運営費を自腹で用意することは正直辛かった。
- 70) 参加人数、年齢、障害の問題がまだ解決できていなかった。

W 楽泳会での活動

・板井

該当なし

・山梶

- 105) 合図の失敗で激しい自己嫌悪に陥った。

109)話を聞いて、翌日から態度を変える自分自身が身勝手に思えてならなかった。

X 卒業論文の活動を通じて

・板井

該当なし

・山梶

57)部活動が試合のシーズンに突入したため、忙しさに拍車がかかっていた。

59)同時に不満も抱いていた。

91)結局参加者を思うように集められなかったことは、自分たちの力不足であった。

99)社会福祉の現場実習が始まり、卒論まで手が回らなくなっていた。

☆活動に対する甘さ☆

認識不足が起こす失敗も数々あった。根拠もないのに大丈夫だとかをくったため、後で後悔することも経験した。

Y: タッチでの活動

・板井

45)安易にたくさんの参加者が集まると思っていた。

57)人が集まらなかったのは宣伝不足。(第1回タッチ)

61)人を集める為には、もっと声かけをしなければならない。

・山梶

62)勢いで開催にこじつけたため、計画自体に緻密さを書いていることに気付かされた。

72)あわただしく準備を進めていくうちに私の中では、何とかなるだろうという目処を勝手に立てていた。

Z: 楽泳会での活動

・板井

該当なし

・山梶

該当なし

α: 卒業論文の活動を通じて

・板井

7)私たちが持参した企画書は企画書と呼べるものではなかった。

8)市役所の人たちの前でプレゼンなんて言われても何もできない、という気持ちが高まった。

・山梔
該当なし

8・参考文献

- ・ 沢木孝太郎「一瞬の夏」1984, 新潮文庫
- ・ ロバート・D・パットナム「哲学する民主主義 伝統と改革の紙面的構造」2001, NTT出版
- ・ 山岸俊男「安心社会から信頼社会へ 日本型システムの行方」1999, 中公新書
- ・ フランシス福山「信無くば立たず」1995
- ・ 立木茂雄「ボランティアと市民社会ー公共性は市民が紡ぎ出すー」2001, 晃洋書房
- ・ 尾崎新「対人援助の技法ー‘曖昧さ’から‘柔軟さ・自在さ’へ」1997, 誠信書房
- ・ 倉本智明, 長瀬修「障害学を語る」2000, エンパワメント研究所
- ・ 障害者福祉研究会「障害者のための福祉 2001」2001, 中央法規
- ・ 池良弘, 佐藤喜也「障害を越えて楽しいレクリエーションーバリアフリーを目指してー」1998, あすなろ書房
- ・ 山際勇一郎, 田中敏「ユーザーのための心理データの多量解析法」1997, 教育出版
- ・ 室淳子, 石村貞夫「SPSS でやさしく学ぶ統計解析」1999, 東京図書
- ・ 宮脇典彦, 阪井和夫「SPSS によるデータ解析の基礎」2000, 培風館

9. 本論文に関して

私たちは2001年10月から卒業論文へのアプローチを始め、プロジェクトを起こしていた。

私たちは始め、障害者スポーツに興味があるということから、障害者水泳チームの楽泳会に押しかけを続けた。そしてその関わりの中で、「タッチプロジェクト」の立ち上げを考えついた。全部で4回、タッチを開催することは出来た。しかし、立ち上げの際に私たちが自分達で掲げた理想・目標というものには、最後まで近づけることが出来なかった。これはプロジェクトメンバーが2人だったということが理由として挙げられるだろう。人数が少なすぎた。私たちは全てのことをこの人数のせいにしてきてしまったかもしれないが、実際2人でプロジェクトを進めていくのは辛いものがあった。いつも何をするにしても、もうちょっと人数がいたらなあ、と感じていたことは確かだ。今、反省すべきは人数集めの方法、また、自分達の技量を無視したプロジェクトを推し進めてしまったことである。

結局私たちは目標を達成するどころか、参加してくれた人等、周りの人達を振り回してだけで、彼らにとっても申し訳ないことをしてしまった。

プロジェクトを進めていく中で、私たちは2月に始めに顔を出してから今に至るまでずっと、障害者水泳チーム、楽泳会に関わらせていただいた。その中で桜井さんを始めとする楽泳会コーチの皆さんには非常にお世話になった。そして、選手の皆様方には仲良くしていただいた。「卒論の為」という私たちの利己的な押しかけにも関わらず、温かく迎えてくれ、良くしていただいた。この場を借りてお礼を言いたいと思う。ありがとうございました。

そして、このようなチームと出会うきっかけを作ってくれ、また、プロジェクト・卒論を進める上で数々の助言を下さった立木教授にもこの場を借りてお礼を言いたいと思う。ありがとうございました。

10・参考資料

最後にタッチ（レクリエーション活動）で使用した、参加募集ビラと、参加アンケートを添付する。



タッチ



ふれあいレクリエーション広場

内容 レクリエーション

障害別のグループに分かれてのレクリエーションと全体での交流会

日時 毎月 第2、第4土曜日 13:30~15:00

行いま

場所 神戸市立 神戸市民福祉交流センター

日程 1回目 6月30日 303教室にて

2回目 7月14日 体育館にて

3回目 7月28日 502教室にて

各回場所が違うので注意

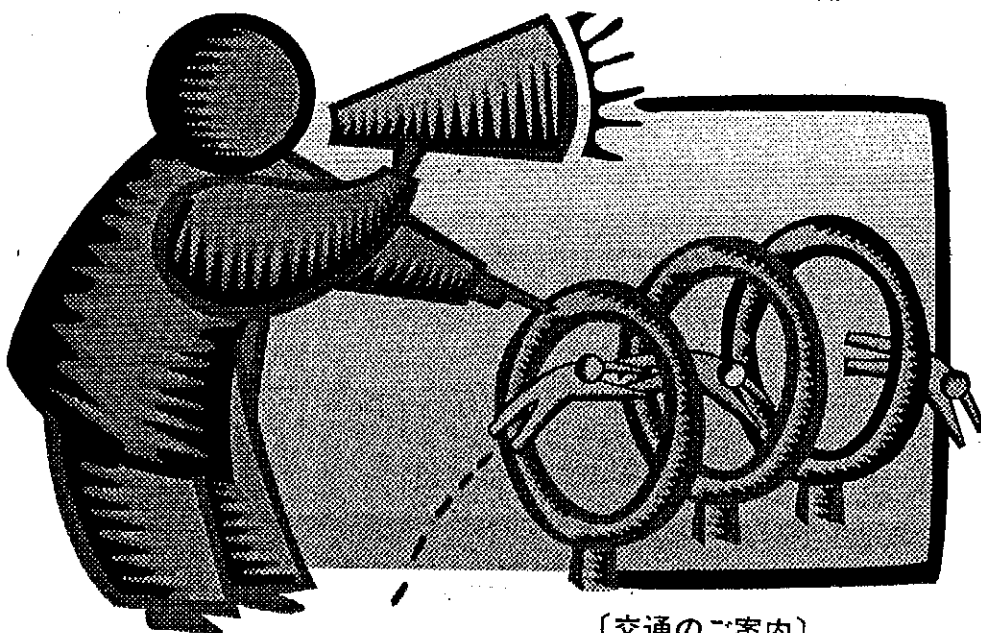
以降の日時は後日連絡します

参加対象 10~60歳くらいの軽スポーツレクリエーション参加可能な方

会費 300円(各回)

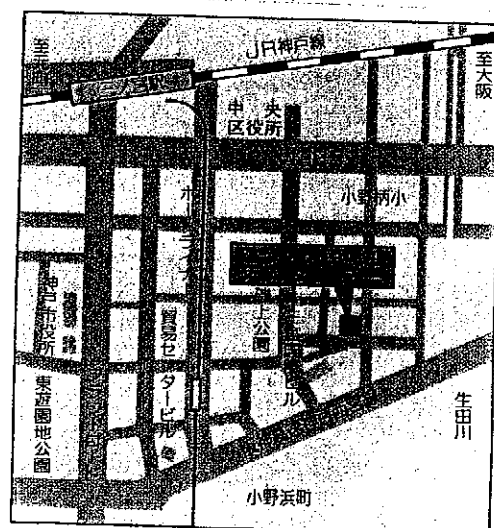
連絡先 板井達明 090-9542-2532 山梶秀夫 090-1229-4965
x38396@kwansei.ac.jp x38493@kwansei.ac.jp

気軽に参加してね!



〔交通のご案内〕

JR「三ノ宮駅」、阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩15分
市バス⑥⑦⑩⑪系統「磯上公園前」から東へすぐ
ポートライナー「貿易センター」から徒歩5分



7月20日(祝)～7月22日(日) 神戸国際展示場

未来空間で遊ぼう!

未来空間

21世紀☆未来体験博

～ユメみたいなユメみたい～
 キーワードは「暮らし」「遊び」「癒し」「ロボット」「宇宙」など。
 未来パスポートを持って「未来」「現在」「過去」を行き来できる「電
 脳都市KOBÉ」の探検に出発しませんか?
 この体験博を通じ、タッチではみなさんの交流をさらに深めるきつ
 かけにしたいと考えています。グループで多くのパビリオンを体験
 し、電脳都市神戸を満喫してみませんか?たくさんのご参加お待ち
 しています。

未来ポスト

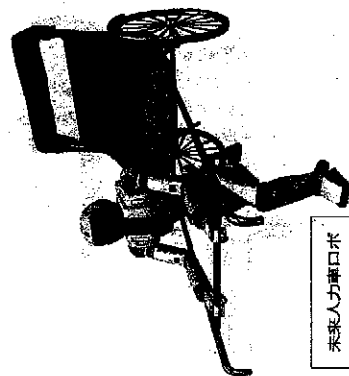
未来ポストとは、「10年後の自分に、今ある『夢』を伝えたい」「10年後の夫
 0年後に成人する子どもへ話したい『思い』がある」「10年後の夫
 (妻)に『ラブレター』を届けたい」そんなみんなの『感謝』『夢』
 『希望』を預け、10年後の未来に届けるというものです。
 10年後の自分や家族、友人に手紙を送ってみませんか?

未来郵便のお届け

2011年の夏に、預けた手紙が受取人のもとへ!

受付料金は、一通につき500円、送料80円です。

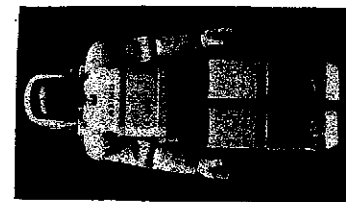
タッチで申し込みを済ませ、各自に届くようにします。
 当日ご記入の上持参下さい。



未来人カプセル

未来博ホームページアドレス

<http://www.mirai-kobe.com>



未来空間

日時: 8月12日(日)

集合場所: ポートライナー三宮駅改札前広場

集合時間: 10:00 昼食は各自ご用意下さい

申し込み: 7月28日(土) タッチ開催時に下記申込用紙に必要事

項を記入の上提出するか、下記連絡先まで連絡下さい。

入場料

一般	1300円
中高生	1000円
小学生	600円

身障者手帳持参者は無料

(2歳以上は付き添い者1名含む)

連絡先

関西学院大学

板井達明 090-9542-2532 x38396@kwansei.ac.jp

立木ゼミ

山根秀夫 090-1229-4965 x38493@kwansei.ac.jp



未来モール

タッチ運営委員会

未来体験博・未来ポスト申込用紙

氏名	
住所	〒
電話番号	

未来体験博
 ポストカード

名

枚

申し込みます
 タッチ運営委員会

タッチ 受付用紙（初回参加の方）

氏名	年齢
住所 〒	
連絡先 ()	
障害の有無 有 ・ 無	
有と答えられた方は障害の種類・等級についてお書き下さい。	
特記事項（これは絶対できない、等）あれば記入下さい。	

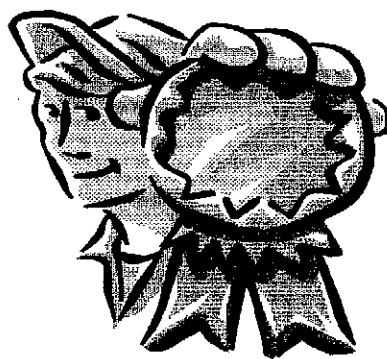
タッチ 参加者アンケート

本日は楽しめましたか？ はい ・ いいえ

一番楽しかった内容をお書き下さい。

あまり良くなかった内容をお書き下さい。

今後こんな事をしたい、ということがあれば何でもお書き下さい。



ご協力ありがとうございました。

タッチ運営委員会